
その出逢い

章久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その出逢い

【Nコード】

N9655V

【作者名】

章久

【あらすじ】

何気ない出逢い、普通に男女が出会って、恋をして、そしてすれ違い、別れを迎える。

その一連の様々な出会いと恋の形を、主人公の杉山直樹が経験する。恋愛に対するそれぞれの考え方に、杉山直樹は、どう対応するのか。

第1章 出逢い

第一章 出逢い

あっという間に、自分の心が奪われてしまうことがある。

一瞬のうちに、それが最初から存在していなかったかのように、過去を忘れることがある。

くよくよ引き摺っていた自分が、愚かに見えて可笑しくなってくる。

もう二度としない・・・そんな誓いなど、たてた覚えすら忘れる。今度こそ大丈夫・・・根拠のない期待と、淡い想いが交錯して、そのまま沈んでいってしまう。

どうして、こんなにも自分に都合よく考えられるのか不思議でならない。

わかつてはいるけれども、この想いは止まらない。

こんなことを何度繰り返ししてきたことだろうか・・・

判ってはいるが、この感情は誰にも、自分にさえも止められない。自分でもコントロールできない。

それが、それが恋に堕ちるといふものなんだろうと気づく。

杉山直樹の出会いは突然にやってきた。

運命・・・安易で簡単には使いたくない言葉だったが、それがもっとも相応しい、そんな出会いだった。

その日、直樹は仕事が上手くいかなかったという言い訳から、勝手にムシャクシャして、二ヶ月ほど止めていたタバコを買い、何度も後悔したパチンコ屋に足を運んでいた。

平日の午後三時頃のことだ。思っていた以上に客が多い。特にサラリーマンの姿が目立つのに驚いた。

上手いかないときは、何をやっても上手いかない。まして、取引先の契約が白紙に戻されて、その報告を上司に行って怒鳴られた直後だっただけに、気持ちにはささくれていた。あと一時間ほどで会社に戻らなければならない。

こんな日は直帰したいのだが、それが許されないのがうちの会社の堅いところだ。

ほんのちよつとだけ気分転換をしてから帰社しようと、駅前のパチンコ屋に入ったのだが、あつという間に五千円摩つていた。

イライラが募ってきてピークに達しようとしていたとき、直樹は煙草を吸おうと喫煙スペースを探して店内を徘徊し始めた。

まだ、会社に戻る気がしなかった。

パチンコ台の間を、人をかき分けながら何個目かの角を曲がったとき、一人の女性にぶつかりそうになつて避けた。

「あら・・・」

長い黒髪に、しなやかな目元が涼しげに微笑む女性が笑いかけていた。相手も直樹を見て、ちよつと驚いた表情をしていた。

直樹は記憶を懸命に辿りながら、「やあ・・・」と微笑み返していた。

そして直樹の記憶は、忘れかけていたひとつの場面に辿り着いた。多忙極まりない勤務先の仕事で、終電を逃したときに、時々使っていた、疲れた体を癒してくれる心地よいスパ「クールスパ」のフロントで仕事をしている女性だった。

名前は・・・

わかるわけがない。

夜中にチェックインし、翌日は午前八時にチェックアウトをする。その繰り返しの中なかで、笑顔の綺麗な明るい女性という印象以上の感情を持っていたとしても、名前を訊くほど直樹も図々しくなかった。

「パチンコなんて、するんですね」

顔を近づけて、意外そうな目で彼女は直樹に囁いた。耳元で喋らないと、店内は五月蠅いのだ。

直樹は曖昧に頷いて、「勿論、するよ」と一言だけ言った。

それは同じ思いだよ・・・直樹はそう言っただけでやりたかったのだ。

「パチンコなんてしない、真面目な男性ひとなのかと思ってました」

そう言いながらも、彼女はホッと安心しているようにも見えた。

そんなに堅い男に見えていたのか。彼女の笑顔を見ていたら、直樹のなかで、忘れかけていた感情が湧き上がってきて、止めることができない状態になっていた。

「偶然ですね」

「ホント・・・」

につこりと笑った彼女の顔は、フロントで不特定多数に見せるそれよりもずっとチャーミングだった。

「運命かな・・・」

柄にもなく、照れたように呟いてみる。勿論、軽い冗談のつもりだ。

「そうかも・・・」

直樹の心臓が高鳴り始めている。

「ただの偶然とは思えないけど」

「あたしも」

すかさず彼女が同意する。

「えっ、そう？　じゃあ、進展させなきゃね」

心臓がバクバクいつていた。図々しいのはわかってはいたが、口が勝手にしゃべっていた。

「進展？」

彼女が小さく首を傾げた。

「あ、深く考えないで。勝手に思ったただけだから」

戸惑いの表情をしているように見えた直樹は、慌てて自分の感情を抑えた。

「なにを、思ったの？」

直樹は、ちよつとだけ迷ったが、ダメもとで言ってみることにした。

「いや、もしよかつたらだけど、今度、食事にいかないかなあって思つてね。あ、もしよかつたら・・・ですけど」

今日じゃなくて今度・・・

実行する可能性の少ない今度・・・

でも、返事しだいでは予定が組める言い方。

「ええ・・・」

彼女は迷うことなく頷いた。

「ホント？」

「もちろん」

「社交辞令・・・じゃないよね？」

「ええ」

彼女は微笑を絶やさずに頷いた。彼女の微笑みは、何度も見たことがあるフロントでの笑顔のそれとは違って見えていた。

「じゃあ、いつなら大丈夫？」

直樹は、このチャンスを逃すまいと畳み掛けていた。

「三日。三日は仕事が休みだから大丈夫」

自分の手帳を見ながら、彼女が応えた。

パチンコ屋の大騒音のなか、二人の顔が近づいていくのがわかる。

直樹の頭脳あたまのなかで激しく半鐘が鳴り響いていた。

社交辞令なら具体的な日程を申し出たりはしない。

三日・・・今日から一週間後だ。

「じゃ、三日にごはんを食べに行こう」

直樹の決断は早い。

「はい」

「ほんとに・・・いいの？」

「もちろん」

「じゃあ、約束・・・」

「電話・・・」

「えっ？」

「電話します。昼間、電話しても平気ですか？」

「ああ、大丈夫。携帯の番号教えるから・・・君の番号は？」

「あ、はい・・・」

直樹は携帯電話をスーツの上着から取り出して、彼女の前に差し出した。

「090の・・・」

彼女の言う番号を押して、発信ボタンを最後に押す。

静かなメロディが彼女のバッグから微かに聞こえた。

「大丈夫、鳴ってるから」

彼女は直樹に向かって微笑んだ。

「その番号がオレの携帯番号だから。でも、一応名刺も渡しておく」
直樹は、名刺入れから一枚取り出して、彼女に手渡した。

相変わらず雑音が酷く、会話が聞き取りにくい。だが、それが幸いしてか、彼女との距離が縮まっていくような気がして、直樹は少し幸せな気分浸っていた。

彼女は名刺を凝視して、

「確か、コンサルタントの会社にお勤めでしたよね」

直樹は驚いた。

何ヶ月か前にフロントで領収書を出して貰ったときに、「何をしている会社ですか？」と名刺を見ながら問いかけられたことがあった。

そのときの直樹の回答を覚えていたことになる。

「名前・・・」

「えっ？」

「あつ、名前を訊いてなかったから」

「あたしも名刺があるんですよ」

彼女はバッグの中から名刺入れを取り出した。直樹に差し出す。
直樹は、彼女の差し出した名刺を見た。

笹木志子

「なんて読むの？」

苗字が、ささきであることはわかる。問題は名前だ。

「もところっていいます」

「これで、もところって読むんだ？」

「ええ」

「素敵じゃない」

「そうですかあ？」

胸の奥で何かが疼いた。

もう二度と恋などしない、再び同じ過ちは犯さない、そう心に誓ったのに。

好きになりかけるとその感情を殺し、相手にその気配を感じるとそこから逃げるように姿を消した日々。

ただの失恋ならやり直せる。

いつそのこと、自分に愛想をつかして自分の前から去って行ってくれた方がどんなに楽だっただろうか。

そんなありきたりの失恋ならば、恋愛に恐怖心など抱かずにいたかもしれない。

普通の失恋・・・

日常的に繰り返される失恋ならば、こんなにも心に深い傷を負うことはなかっただろうに。

今迄だって、馴染みのスパの、フロントの向こうで微笑む彼女に何度傾きかけたかわからない。

そのたびに直樹は自分の感情に叱責し、憤慨し、諦観を植えつけてきたのだ。

やっと諦められたのに・・・

スパから自分自身の意思で足を遠のかせて、やっと諦めがついた

のに・・・

こんなところで出会ってしまっなんて・・・

感情の赴くまま誘ってしまっなんて・・・

過去の痛みを忘れるなんて・・・

とんとん拍子に進んだデートの約束も、過去の恋愛の苦い思い出に悩まされてきた直樹にとっては、不安と苦悩を思い起こさせるだけだった。

いや、今度こそ違う。

そう、今度は、今度の恋は、今までとは違うんだ。

「あなたは本気で女性を愛したことないのよ。いつもその気にさせて、相手が本気になった頃引いていく。恋愛をゲームだと思っているんじゃない。最低だわ。何人の女を自分に惚れさせることができるか、そんな遊びを人生のなかで楽しんでいるだけなんだわ。だから、欲しいものが手に入った途端、もう飽きてどうでもよくなるのよ。手に入れるまでが本気で、手に入ったら、もういらなと思うてしまうのよね。あなたって、本気で愛せない可哀想な男なのね。あたしって、バカみたい。あなたを本気で必要として、でも、あなたはあたしなんか必要じゃないのよね。だって、あたしが傍にいてほしいとき、あなたは必ずいない・・・あたしが淋しいとき、あなたは絶対にあたしの傍にはいなかった。あなたにとって女は道具？ いや、暇つぶしの相手かも。それともあたしだけなのかしら、こんな仕打ちにあったのは・・・ほんと、最低だわ。こんな男を愛してしまったあたしも最低、最悪だわ」

違うんだ、違う。

好きなんだ。

いつも本気で好きになっているはずなんだ。

好きなのに・・・

好きなのに、何故か相手から離れて行ってしまう。

好きなのに、どうしても心を開くことができない。

自分だけが傷つくのならいい、しかし、必ず自分よりも相手により深い傷を作らせてしまう。

愛する資格など、本当は、自分にはないのかもしれない。

「どうしたんですか？」

突然黙ってしまった直樹に、不安そうに覗き込む志子の顔がまじかに見えて、直樹は瞬間的に動揺した。

「い、いや、なんでも・・・」

「・・・」

志子は首を傾げた。

「じゃあ、三日、その前に電話しますから」

直樹は慌てて予定を確認した。

「はい」

直樹は動揺を悟られまいと必死だった。

うまくいった。うまく行き過ぎた。

でも、本当にこれでいいのだろうか。

志子が去ったあと、直樹はその後姿を見つめながら、何ヶ月か先の自分の傷ついた姿を想像して、ちよつと苦い顔になった。

【第2章に続く】

第2章 最初のデート

第二章 最初のデート

「あなたにとって、あたしは何？　どういう存在？　恋人なんて見え透いたお世辞は言えないでしょうね。だって、恋人だったら大事なときに絶対傍にいてくれる筈だものね。あなたはいい加減だわ。口では好きだの、愛してるだの、相手をその気にさせて、でも絶対本気じゃない、そうでしょ？　あなたは本気で人を愛したことがあるのかしら？　怪しいものだわ。それとも、あなたの愛し方ってこんなにも淡泊で冷めてて素っ気無いかしら？　今まであなたを好きになった人たちが可哀想だわ。もちろんあたしも可哀想。こんな女をバカにしたような扱いしかできない男に本気になるなんて、ホントバカだわ。もう懲り懲りよ。あなたの顔も見たくない。あなたを見ていると、本当に自分が惨めになってくるわ。そうやって女の自尊心さえ、あなたは奪っていくのよね。もう二度とあたしの前に現れないでほしいわ」

あいつの、憎しみに溢れた目に見つめられて、直樹は目が覚めた。
ゆ、夢・・・か。

新しい恋愛の始まりには、必ずといっていいほど、同じ夢を見る。それも、決まって罵倒されている夢だ。

あいつか・・・

約束の三日になった。

初めて会った翌日に、直樹は志子に一度電話をした。そのときに携帯電話のメールアドレスを訊いた。

そして、好きな食べ物や待ち合わせ場所などをメールで確認し合った。

考えた末、新宿で待ち合わせて、落ち着いた個室で和食を堪能できる懷石料理の店に予約を入れた。

待ち合わせは午後七時。直樹が仕事を終えて、新宿に駆けつけられるギリギリの時間だ。志子は既に待っていた。仕事が早く終わったので、新宿をぶらぶらしていたのだと直樹に説明した。

予約した店は、新宿駅から徒歩で二分程度。隠れ家的な存在として注目を浴び始めている懷石料理の高級店だ。

店内は、日本庭園を思わせる装飾になっていて、個室同士が小さくせせらぎで区切られている。ふたりは、店員に落ち着いた個室に案内された。

部屋は、六人用の個室で掘りごたつになっていて、小さな床の間があり掛け軸までかかっていた。ふたりには申し分ない部屋だった。コースをすでに電話予約してあるので、まずはビールを注文した。志子はタンクトップの上に薄手のカーデガンを羽織っていた。下はロングスカートだった。

あらためて正面から彼女を見ると、やはり美人には違いなかった。体型はどちらかというとスリム、胸もそれほど大きいとは言えないと直樹は思った。

小さい顔に切れ長の目、あまり化粧は厚くなく、薄っすらとピンク色の小さな唇が妖艶さを放っていた。

年齢は・・・おそらく二十六、七くらいだろうと予想した。

長い髪は、僅かにウェーブがかかっている、スタイルにぴったりと合っていた。

スパで働く制服姿しか見ていない直樹に、新鮮でかつ魅惑的に映ったことは確かだった。

ビールが運ばれてくるまで、直樹は落ち着かなかった。彼女の方

がずっと落ち着いている。慣れていないわけではなかったが、今回は何故か緊張していた。

「最近は何を見ないんですけど」

志子がほんのちよっぴり微笑みながら問いかけてきた。

「ああ、仕事が落ち着いたので、泊まるのが少なくなってる・・・」

直樹の返事は、どこか言い訳っぽかった。

以前は、港区に職場があったので、彼女が働くスパは遅くなったときに宿泊する場所としては最適だったが、職場が代々木に移転したので、港区のスパに行く予定がなくなったのだ。

泊まらなくなったのではなく、新宿区にあるスパに宿泊することが多くなったのだ。仕事が忙しいのは変わらない。

なんだかそれを見透かされているようで、直樹は俯いていた。

「気にしてくれてたんだ？」

悪戯っ子のような目をして、直樹は志子に訊いた。

彼女ははにかむような表情で、「お得意さまですから」と、直樹の期待はずれな回答を返してきた。

失礼しますと店員が顔を出し、ビールと小鉢が運ばれてきた。ビールが置かれて、先付けが目の前に置かれている間、ふたりは黙って店員の動作を見つめていた。

「まずは、乾杯しましょうか」

直樹は、「今日はつきあってくれてありがとう」と言っ、グラスを合わせた。一口飲んだビールの味は格別な気がした。

「美味しい」と志子も小さく呟いた。

そして、次々と運ばれる小鉢に驚き、感激しながらも、ふたりは箸を動かし始めた。

「もてるでしょう？」

直樹は、様子を見ながら話しかけた。

「あたし、ですか？」

直樹は黙って頷いた。彼女は少し思案していたが、「つきあってる人は何人かいますけど」と言った。

意外な返事だった。

「何人か？」

直樹が思わず訊き返すと、彼女は面白いように笑って、

「あ、あたし結婚してるんです。言っただけだと思っただけと、小さく笑った。」

直樹の脳裡に激震が走った。

既婚・・・だったのか。

「子供はいませんが、もう十年になるかな。あ、あたし、今年で三十二歳なんですよ」

二度目の激震だった。

完全に直樹の築き上げたイメージは、二度のマグネチュード7強の激震であっさりと崩壊した。長い人生と、それなりの経験で耐震強度はしていたものの、目の前にいる魅力的な女性が、実は三十二歳で既婚者だったというのは、直樹のデータには織り込まれてなかったようだ。

直樹は箸を止めて、じっと目の前の人妻を見つめた。

「見えないよ、うん、全然見えない」

志子は、そういうリアクションには慣れているようだった。思ったとおりの反応に満足するかのように、彼女は微笑んでいた。

それにしても、つきあっている人が、何人かいる、というセリフは聞き捨てならない。

「二十二歳で結婚したんだね？」

「ええ」

「でも、子供はいないんだよね？」

「できちゃった結婚ではないらしい。」

「ええ」

まあ、子供がいたら変則勤務のスパなどでは働けない。

「ずっと共働き？」

「なんだか詰問調になっているようで嫌だったが、訊かないわけにはいかない。」

彼女は黙って頷いて、

「去年、一戸建てを買ったんです。で、もう少し働かないと」と言
った。

「一戸建て？」

「埼玉の方なんですけどね。小さな建売なんですけど、そこで旦那
と旦那の両親と四人暮らしなんですよ」

「旦那さんは何をやってる人？」

「職人。大工をずっとやってるの」

「いくつ？」

「同い年」

おぼろげながら、彼女の亭主が浮かび上がってきていた。

「子供もないし、今は作るつもりもないけど。なんか、あたしは
家でじっとしてるタイプじゃないし、仕事好きだし、で、もう少し
共働きしてお金貯めようかと思って」

「ふん」

直樹は曖昧に返事をした。

彼女の共働きの理由や経緯にはあまり興味はなかった。問題はさ
っきの一言だった。

「今は、旦那さんのほかにつきあっている男がいるって言った？」

彼女は黙って頷いた。

どこか面白がっているようにも見える。

「今は、三人かなあ」

「三人？ それは、全員、その、要するに・・・」

直樹が少し言い淀んでいたときに、彼女から、

「大人の関係ですよ」とあっさりと言い切られた。

直樹の頭の中では、さっきの激震の余震が続いているようだった。
例えていうなら、崩落した「経験」という建物^{えいぐ}が、今は土台から
根こそぎ抉^{えぐ}られていくような気分だった。

「ひとりは五十代の、どこかの会社の部長さんで、勿論彼にも家庭
があつて、いわゆる不倫です。一緒に飲みに行ったり、カラオケや

ったり、そういえば、新宿二丁目に馴染みのオカマバーがあるんです。そこがとっても面白いんですよ」

彼女は急に饒舌になった。

直樹は、言葉を挟むことなく、多少引きつっているであろう微笑んだ顔で聞き入っていた。

ひとは見かけによらない・・・嫌というほど脳裡を駆け巡っていた。

最初、パチンコ屋で偶然会ったことでも衝撃的だった、というよりパチンコ屋など彼女が出入りする場所に相応しくなかったと思っただが、こうして話を聞いているうちに、それもごく自然に思えてきた。

「今は月に二、三度ですね、彼に会うのは。彼も部長さんだから仕事に忙しくて時間取れないらしいの」

なんでもないことのように、志子は話し続けた。

「会えば、その、必ず？」

「勿論」

彼女は、当然というように頷いた。

「その人は、今あたしが一番好きな人。彼があたしから離れていかない限り、あたしは別れるつもりはないの。もっと頻繁に会いたいのだけだね」

志子は少し寂しそうに言った。直樹の胸のうちがキュンとなるのがわかった。

「そっか・・・」

「もうひとりとは・・・こんな話嫌い？」

直樹の顔が相当ひきつっていたのだろっか、彼女は話すのをやめた。

直樹は首を振って、

「いや、続けて。話すのが嫌じゃなければ」と慌てて言った。

「あたしは別に構わないんですけど。ちょっとイメージ狂った？」

直樹は遠慮がちに頷いた。

「イメージが狂うっていうより、意外だったって感じかな。結構、驚いてる」

正直な気持を、直樹は打ち明けた。そんなの普通のことでしょう、というにはちよつと白々しいと思ったのだ。

「嫌いになつたかしら？」

「えっ？ い、いや、別にそういうことはないけど・・・」

いきなり核心に触れてきたので、こっちがどぎまぎしていた。相手の方が、彼よりも上手のようだ。

「もうひとり、二十代前半で、ちゃんとした年はよくわからない。パチンコ屋でナンパされて、一緒に飲みに行つて、で、今はたまにつきあうって感じの人」

「ナンパ・・・」

「うん、あたし、よくナンパされるのよ。全員ついていくわけじゃないけど、そんなときは、ちよつとイイ男だったし、やりたい気分だったからね」

彼女は悪戯っぽい笑顔を向けた。

「そいつは、あたしとやりたいときにしか電話してこないし、あたしもそういう気分のときにしか電話しない」

つまり、セフレということだ。

「酒・・・」

「えっ？」

彼女が訊き返した。

「お酒がなくなってるから・・・何か、飲む？」

直樹は話をはぐらかした。息苦しくなつたからだ。

「じゃ、ウーロンハイを」

直樹は店員を呼んで、ウーロンハイと生ビールを注文した。まだ二杯目のビールなのに、随分飲んだように酔つてきていた。

このまま飲み続けたら悪酔いしそうだな、直樹はそう思った。

ここで一呼吸おかなければ持ちこたえられそうにない。だが、話題を変える気もなかった。かなり興味深い話だった。

「もう一人は？」

直樹は、怖いもの見たさで訊いた。

「ああ、もう一人はどうでもいい人。トシは三十代前半かなあ。よくわからないけど、勤め先の人から紹介されて、ちよつとかっこよかったからつきあっただけだ・・・」

志子は、不味い料理でも食べたような表情をして、

「全然ダメだった。一回やったけど、セックスは下手だし、自分勝手だし、全然気持ちよくなかったし、もう会う気もしないんだけど、しつこくメールが来るから、セックスなしで会ってあげてるんだ。それも、もう止めるけど」

直樹は啞然として、完全に料理を食べる箸が止まっていた。

志子は箸を進めている。

「食べようかな」そう言つて、直樹は小鉢を手にとった。

料理は、どれもとても美味しかったと記憶しているが、いったいどれが美味しかったのか、途中から料理の中身の記憶が飛んでいた。「旦那さんは、知らないよね、こういうこと」

愚問だった。だが、訊かずにはいられなかった。

「勿論、知らないわ。知られたら困るの。家庭は壊したくないから。旦那以外は、あくまでも遊びであり、本気じゃない、ただの不倫よ」男のような考え方だった。浮気や不倫に抵抗はなく、かつこい男から誘われればセックスも厭わない。感情の赴くまま、気分次第の生活、いや人生を送っているといえる。どこか羨ましくもあり、危険でもあった。

果たして、旦那は気づかないものだろうか。それとも、旦那も同じようなことをしているのだろうか。

不思議な夫婦だ。

もっと踏み込んで訊きたいところだったが、最初のデートでそこまで踏み込むのも気が引けた。だが、ここまで話されればもう垣根はないようにも思えた。

「旦那さんのセックスは？」

「どうかな。たまにするかも」

旦那との関係が冷めたわけではないらしい。平和な家庭に守られながらも、危険な遊びに身を委ねる。感情のまま体を開き、快楽を求める。いつからこういう事をしているのかわからないが、結婚十年の三十二歳の既婚者がする行動としては、おそらく否定的に考える人の方が多いことは間違いない。

直樹は、最新鋭の戦闘機でも見るような目をして、志子を見ていたかもしれないかった。

「なにか？」

「いや」

「幻滅した？」

「いや、ちょっとびっくりしたけどね」

彼女はにっこりと微笑んでから、

「終電までには帰りたいんですけど、これからどうします？」

腕時計を見ると、午後九時二十分過ぎだった。午後七時に待ち合わせをして店に入っているから、二時間が経過したことになる。

懐石料理も、すでにメインが出終わってデザートを用意が来ているところだった。

「終電で？」

「ここだったら、十二時ちょっとすぎかな。絶対泊まれないの、家庭があるから」

セリフは男と一緒だった。そういうセリフを吐いて、同じような生活を送っている友人を、直樹は知っている。

もしかしたら、直樹よりその友人の方が気が合うのかもしれないと、ふと思った。

十二時過ぎまであと二時間ちょっと・・・自然と頭はそっちの方に思考がいく。

彼女も同じなのだろうか？

それとも挑発して、何を考えているのか詮索しているのだろうか？
次に行く店は考えていなかった。もちろん予約などしていない。

ここで直樹が歌舞伎町の裏の方に行こうとしたら付いてくるだろうか？

時間的には十分にその余裕がある。

誘っているのか？ それとも自分の単なる暴走だろうか・・・

直樹は迷っていた。

「どうします？」

彼女は回答を求めているというより、直樹の返事を面白がっているようにも取れる。

「食事は？」

「もう、お腹一杯です。美味しかったわ」

「お酒も？」

「ええ、もういいです」

あまり飲んではいけないようだ、顔も赤くない。

「じゃあ、デザートを食べってから、とりあえず出ようか」

「ええ」

「ちょっとトイレに行ってくるわ」

彼女はポーチを持って立ち上がった。直樹は、店員にデザートを持ってくるように言ってから、彼女の後ろ姿を見つめて、乏しい知識と経験を頭の中でフル回転させて、次の場所の選定にかかった。

新宿で気の利いた店を直樹は知らない。

バー？ カラオケ？

いくらでもあるだろう。だが、そのどれも自信を持って連れて行かれる店ではなかった。何故なら、行ったことがなかったからだ。

さて、どうするか・・・

自分自身の本音と欲望に身を任せて、そしてもしかしたら相手も考えているかもしれない可能性に期待して、思い切って誘ってみるのも手ではあるかもしれないなかった。

その勇気があるならば・・・

「あなたは、あたしのことを本当に愛してくれているのかしら？
頷いたってダメよ。怪しいものだわ。あなたにとって女は、セッ
クスの道具なの？ それとも暇つぶしかしら？ 確かにあなたは優
しいわ。仕事もできるし会社での地位や信用も厚い。だから仕事が
一番大事なのも理解しているつもりよ。だから、たとえあたしの誕
生日でも、クリスマスでも、あなたが仕事だって言えば、あたしは
我慢してきたわ。だけど、ただね、それが毎年だったり、なにか
ある度に仕事で潰れれば、あたしだって不満が募ると思うの。わか
る？ わからないでしょ、きっとわからないわ。わかってるなら、
こんなにも放っておけないはずだもの。あなたがあたしに会いにき
てくれるのは嬉しいの。ほんとに嬉しいし、ずっと傍にいてほしい
わ。だって、あたしはあなたを愛してるもの。でも、あなたは自分
があたしに会いたいときだけしかここにこない。あたしがいくら来
てほしいって望んでも、あなたがあたしを必要としないときは、絶
対ここにはこない。つまり薄情なのかしらね。それとも、あたしの
こと、そんなに好きじゃなかったってことなのかしら？ やっぱり、
あたしはあなたの欲求の捌け口って考えた方がいいのかしら？」

悪魔の声が、またどこかからか、直樹の耳に鳴り響いてきた。そ
の声は、憎しみに満ちていた。

【第3章へ続く】

第3章 躊躇い

第三章 躊躇い

笹木志子との、最初のデートから一週間が過ぎた。

結局、最初のデートは食事のあと、歌舞伎町の街中を目的もなくぶらぶら歩いたあと、駅前に戻ってきたことを口実に直樹が帰ることを提案して別れた。

午後十一時前のことだ。

彼女の方から、ホテルに誘うようなセリフは一度として出なかったし、直樹自身も誘うかどうか迷っているうちにタイミングを外した形になった。でも、それでよかったのだと、直樹は納得していた。あの夜は、歌舞伎町の街を歩きながら、彼女はしつこいように直樹に確認してきた。

「あたしは、貴方ともそういうつきあい方だったらOKなんですよ。貴方があたしにまともなつきあいを望んでいるとしたら、例えば結婚したいとか、つきあう男を貴方ひとりに絞れとか、そんなつきあいを望んでいるとしたら、それには答えられないわ。あたしは今の家庭を壊す気はないし、今つきあっている人たちとも別れるつもりはないの。とってもいいおつきあいをしてるし、男を一人に絞るなんて、あたしにはできないわ。もしかしたら、これから男を作るかもしれないし、気が向いたら見知らぬ男とセックスをするかもしれない。それを止めたり、嫌がられたりされたくないの。だから、貴方があたしに本気になってくれても構わないけど、それによってふたりの仲が拗れたりして、もし貴方があたしの職場に乗り込んで

これだけでも困るのよ。貴方と深い関係になることは嫌ではないし、貴方とだったら体の関係になってもいいと思ってる。今日、食事に来たのもその気があったからよ。それは信じて欲しいの。でも、束縛されるのは迷惑なの。どう？　そういう関係で貴方は我慢できるかしら？」

直樹は返答できなかった。

自分の中で下心があったことも事実だったが、しかし、彼女から意外な告白を受けて、彼女との関係を終わらせることも、また進めることもできなかった。

彼女に失望したわけじゃない。

だからといって彼女のように気楽な関係を作ろうと思ったわけでもない。

都合のいい関係。気楽なセックスフレンド。大抵の男はラッキーだと喜ぶだろう。しかも、そんな関係を女のほうから望んでくるなんて。

奇跡に近い、と直樹は思った。

だが・・・直樹の気持ちはしつくりとこなかった。

食事の翌日に、志子からお礼のメールが届いたほかは、特にメールも電話もなかった。

直樹も特に連絡を取ることもなく、仕事の忙しさであつという間に一週間が過ぎていった。

だからといって、直樹の記憶から志子の存在を消すことは出来なかったし、直樹自身が志子に対して気になり始めていることも確かだった。

そんなときに、一週間ぶりに志子から直樹にメールが届いた。

『おひさしぶりです。その後、お仕事は忙しいですか？　よかった

ら、また会いませんか？ それとも幻滅してしまったでしょうか？」

志子の中で、直樹に会う気持ちがなくなっていたわけではなかったようだ。

だが、直樹の中で、志子に会いたいという気持ちが、徐々に薄れていくことは事実だった。

既婚者、家庭は壊したくない・・・これだけで、もう会う必要性がなくなる。

直樹が不倫を自ら望んでいる訳ではなかった。しかし、都合のいい女に魅力を感じていないわけではなかった。

今、つきあっている人が三人いる。

彼女の口から出る言葉のひとつひとつが衝撃的だった。

直樹は独身だ。

だからって別に結婚相手を探しているわけではないし、中学生のようなピュアな恋愛に身を焦がそうとしているわけでもない。

気軽に、後腐れなく、特に金を要求してくるわけでもない、体の関係までいける都合のいい相手がいること自体、もしかしたらこんなラッキーなことはないと喜ぶべきなんじゃないだろうか・・・

だが・・・

何故か、それに乗る気にならない自分がいた。

正義感？ モラル？ 常識？ 潔癖？ それとも罪悪感？

どれも、ちよつと違うような気がした。

どうしても引つかかるものがあつたのだ。

だから、それがすつきりするまで、連絡もせずにようと思っていたのかもしれない。

メールが届いても、別段嬉しい気持ちも起きなかったし、慌てて返事を送ることもしなかった。

あのとときの自分は何を望んでいたのだろう。

何がしたかったのだろう。

女性と知り合い、恋愛し、熱愛され、そして求め合う。

周囲から祝福され、自慢できるような相手で、そして将来の設計も出来る。

そんな相手を望んでいたのだろうか。

一時の、ほんの一瞬の感情のまま行動し、運良くつきあうことができ、ふたりの時間が経過して、しばらくすると気持ちがちよつとだけ冷めて、そうすると相手の欠点が目について、それを改善して欲しくて相手を責めて、結局のところふたりの関係に行き詰まり、最後に軽蔑と憤怒を残して自分の前から相手が去ってゆく。

そんな繰り返しに嫌気がさしていたんじゃないのか。

だが、今回の出会いは全く違う。

本気にならない恋愛、体だけの関係、それはそれで満たされる部分はあるのだろうか、自分はそれで果たしていいのだろうか？

満たされるのだろうか？

そして、もし本気になってしまったら……

直樹は静かに首を振った。

直樹は今まで遊びで女とつきあったことなど一度もない。まして一夜限りの関係を持った女も今までに一度もない。そんなに簡単にセックスが出来るとも思っていなかった。

常に本気になって、相手を大事に想う。

束縛心や独占欲は年齢とともに薄れてはいるものの、いつも責任を取るつもりで、全力で愛してきたつもりだった。

その直樹が、そんな都合のいい恋愛ができるだろうか？ 彼女が言うように、いずれは独占したくなり、自分以外の男に嫉妬心を燃やし、家庭を壊して自分を選ぶように迫ったりしないだろうか？

自信はなかった。

三十三歳の直樹が、分別のつく大人が、今までと違った形の恋愛をしてみる。今までの恋愛に失望して、恋愛に恐怖すら覚えていた直樹に、新しい恋愛の形が現れたとき、彼は一歩踏み出してそれを受け入れて、彼に得るものが果たしてあるのだろうか。

「そう、確かに最初はあたしが本気にならないでほしいってあなたに言ったかもしれないわ。それは認める。だから、あなたがあたしを責めるような目で見えるのもわかるわ。あたしの言ってることも、もしかしたら身勝手な言い分かもしれない・・・いいえ、きっと我侭な言い分よ。でも、でも仕方ないじゃない！ 本気になっちゃったんだもの。あたしのほうが本気であなたを愛してしまったのよ。最初、あたしはあなたに言ったわ。結婚は考えていないわ。だけど恋はしたいし、恋人は欲しいって、あなたにそう言っ、あたしはあなたと付き合い始めた。あなたもそのつもりであたしとつきあっていたと思うの。先に約束を破ったのはあたしの方かもしれないわ。でも、あなたは段々本気になっていくあたしを優しく包み込んでくれた。だから、だからあたしもそれでいいと思っ、どんどんあなたを好きになっていったわ。気づいたら、あなたとの結婚を本気で考えてた。でも、あなたは逆だったのね。あたしが本気になればなるほど、あなたはあたしから距離を置くようになった。そうでしょう？ あなたにとって、あたしは負担だったのよね。本気になっていくあたしの心が重荷だったんでしょ？ 否定してもあたしにはわかるわ」

最初のデートから十日が経った。志子からメールが届いてから三日が過ぎた。返信メールを送るかどうか迷った末、直樹は送らなかった。

まだ、結論がでていなかったのだ。

そんなある日、直樹は会社の命令で外出していた。

会社から強制的に受けさせられた研修がこんなにも退屈だとは思わなかった。

新宿の高層ビルの一角で行われている、営業マン育成研修だった。こんな研修、出席してもしなくても一緒だ、という気持ちで直樹の中にあつた。

もつとも、成績の振るわない直樹をどうにかしようとしている会社の思惑も理解できたし、そもそも営業成績がもう一步の直樹にも責任がある。

直樹は会場を抜け出し、都会の喧騒へと足を向けた。静かな研修会場にうんざりしていただけに、都会の人混みも車の騒音も、苦ではなかった。

暫く繁華街をのんびり歩いていると、後ろからポンと肩を叩かれた。

研修をサボっているだけに、びっくりした。

振り向くと、そこには微笑んだ志子が立っていた。

直樹は異常なまでに動揺した。

「偶然ね」

そんな直樹の動揺などお構いなしに屈託なく、志子は笑っていた。

「そ、そうだね」

かなり動揺している。

「仕事中？」

「い、いや、ま、そうだけど・・・」

「どうしたの？」

「別に、ちょっと驚いただけで、凄い偶然だから・・・」

「そうね。こんなところで会うなんて、運命かな」

涼しげに笑う彼女を見ていたら、やはり心が疼いてくる。

「な、なにしてるの？」

今度は、直樹の方から問いかける。

「あたし？ 仕事の帰りよ。まだ時間あるからぶらついてるんだけど」

「そう・・・か」

この場から少しでも早く離れたい自分と、誘ってどこかへ行こう

かと考える自分が、頭の中で格闘を始めていた。返信メールを送っていない罪悪感もある。そのことを責められたら、どう言い訳しよう……

直樹は冷や汗が吹き出てくるのを背中に感じた。

もしかしたら、このまま志子に会わないでいれば、記憶から消し去ることができたかもしれないのだ。

偶然にも会ってしまったことが、直樹の下心に火が点^{とも}ってしまっただのかもしれない。

「特に急ぐ用事がないなら、お茶でも飲みに行きます？」
誘っていた。

「あたしはいいわよ。でも、大丈夫なの？」

「二、三時間なら」
間違っではない。

研修は、あと三時間で終わる。通常はそのまま直帰するのだが、生憎今日はこのあと会社で営業会議があった。

午後三時過ぎ、酒を飲むには早すぎる。それに、午後六時三十分から会議だった。

空腹感はなかったから、喫茶店で話をするくらいだろう。
いったいなにを話せばいいんだろうか？ 直樹は不安な気持ちになっ

「どこかに入ろうか？」

直樹は見回して適当な喫茶店がないか探した。

「ホテル……」

「えっ？」

「ホテル……」

「なに？」

「ホテルでもいいわよ。ホテルに行く？」

直樹は返答に困った。

彼女の提案に無条件に賛成している自分と、どこかブレーキを掛けている自分と、ふたりの自分が身体の中で綱引きをやっていた。

「そんな気ないか・・・」

愚図愚図している直樹を尻目に、結論まで出そうとしている彼女は、どこか残念そうに見えたのは、直樹の思い過ごしだったのだろうか。

「いや、そんなことないけど」

それだけというのがやっとだった。

出来れば今すぐにでもラブホテルに直行して彼女を抱きたいと思っている。それだけ彼女は魅力的だったし、彼女を求める自分が確実にいることも、直樹にはわかっていた。

だが・・・

躊躇いがあった。

迷いがあった。

彼女に失望を感じていた。

屈辱に苛まれた。

この関係に希望をもてなかった。

そして・・・

欲望の炎が既に消えていた。

だが、志子に偶然再会したことで、志子の屈託のない笑顔を見たことで、直樹の欲望に再び男としての野獣のような欲望に火が点いたことも確かだった。

志子はいきなり直樹の手を握って歩き出した。

驚いた直樹は、それでも素直に手を引かれた赤ちゃんのように彼女のあとについていくしかなかった。

彼女がどこに行こうとしているのか、大体は見当がついていた。拒むことをしない直樹は、あとになって、志子に「やっぱりりたかったんでしょ」と問い詰められても文句は言えない状況を作っていた。

歌舞伎町の繁華街を抜けると、そこは派手な外壁と看板に包まれた異様な区域だった。

休憩という文字が嫌でも目に飛び込んでくる。

すうっと塀の中に消えるカップルの後ろ姿を横目で見ながら、直樹は後悔しないかどうか自問自答していた。

「ここでいいかしら？」

慣れた口調と足取りで、彼女は目ぼしいホテルをピックアップした。

「どこでも・・・」

直樹の返事は、その後に一言も言い訳できないほどに彼女の行動を肯定していた。

しつとりと落ち着いた雰囲気を持つエントランスと、高級感が漂う調度品に包まれたロビーに、直樹たちは吸い込まれるように入った。

彼女はボードの中からさっさと部屋を選んで、部屋番号のボタンを押していた。

志子は、フロントで部屋のキーを受け取り、直樹の手を引いたままエレベーターに乗って五階へ上がった。

その間、直樹は志子に手を繋がれたまま、まるで子どものように素直に、そして自らを納得させるように、一言も発することなくついていった。

なるようになる。

子どもじゃないんだから、分別のある大人が、お互いに責任のある行動を取っているのだから、何も躊躇う必要などないじゃないか。正義感ぶって、生真面目ぶって、まだ早いだの、不倫の関係はよくないだのと無粋なことを言うつもりはなかった。

初めての経験であるわけもなく、特に緊張感もないのは当然だとしても、どこかしつくりいかなない気持ちをひた隠して、直樹は志子を選んだ部屋へと吸い込まれるように入っていた。

「やっぱりあなたを嫌いになれない。愛してしまったんだもの。あなたと離れるなんて、あたしにはできないわ。どうしても本気になっ

ちやいけないの？ どうして全身であたしを受け止めてくれないの？ なぜあなたはそんなにも冷めていられるの？ あたし、辛いわ。あたし、苦しいわ。あなたを失うのなんて嫌。あなたと離れることなんてできない。どんなに冷たくされても、いくら離れていても、あたしはやっぱりあなたの傍にずっといたい。あたしにはあなたが必要だわ。あなたにとってもあたしが必要なはずよ。これからもずっと傍にいて？ あたしのことだけを見ていて？ あなたがいなくなったら、あたしは狂ってしまうわ」

部屋に入った途端、直樹の脳裡に、また、あいつが、不敵な笑い顔とともに蘇ってきていた。

【第4章へ続く】

第4章 初体験

第四章 初体験

杉山直樹は、大学二年生の時に、池袋駅周辺だったと記憶しているが、生まれて初めて女の子とラブホテルに入った。

確か・・・季節は晩秋だったと思う。

何故季節の記憶が鮮明かというと、相手が真っ白なモヘアのセーターを着ていたことをはっきりと憶えていたからだ。もちろん相手は、当時つきあっていた恋人である。

そう、あのときは、彼女の手を握ったくらいで、彼女の体に触れるどころか、キスさえまだしていなかった頃だった。

それがいきなりラブホテルである。

経緯はこうだ。

いつものようにデートで映画を観た。渋谷だった。

学生に金の余裕があるわけもなく、安くて旨いというレストランでメシを食って、彼女の住んでいる東京のはずれまで走っている私鉄の乗り継ぎ駅まで送ろうと、ふたりでJRに乗っていたときだった。

彼女が混んでいる電車の中で、急に直樹の手を取って自分の胸に押し当ててきた。

驚いた直樹は、すぐに離そうとしたが、彼女は直樹の手をぎゅっと押さえたまま、からかうような微笑を直樹に向けていた。

「触りたいんでしょ？」

小さな、直樹にだけ聞こえるような声で彼女は囁いた。

「えっ・・・」

どう返答したらいいか戸惑っている直樹を面白がるような表情だ

った。いきなりの、突拍子もない彼女の行動は、しかし、直樹の心を確実に読み取っていた。つきあって一年、せいぜい手を繋いで歩く程度の関係だった直樹は、決して彼女の体に興味がなかったわけではなかった。まして、彼女は非常に豊満な胸と、艶のある綺麗な肌の持ち主だったのだ。健康的な男なら、ましてつきあっている彼女なら尚更、セックスしたいと思うのは当然だった。

結婚まで清い関係で、なんて時代でもない。

彼女は直樹より二歳下の十九歳、とても魅力的な時期だったことは確かだった。

一年も直樹が彼女に手を出さずにいたのは、決して自分を抑制していたわけではなかった。まして、別につきあっている女性がいたわけでもない。

直樹が真面目で、結婚まで手を出さないと決めていたわけでもない。勿論、直樹はホモではない。

彼女を真剣に好きだったことは確かだった。欲しいと何度も思ったことも確かだ。

それなのに、何故・・・？

応えは簡単だ。直樹に女性経験がなかったからだ。

女性の体の仕組みはともかく、どうやってエッチまで誘うのか、どうしたらそういう関係にもっていけるのか、頭の中と友人たちの会話の中では想像できても、実際に行動し、手にし、目にしたことになかったから、つきあっている彼女にさえ、どうしたらよいのか、さっぱりわからなかったのだ。

そんなことに誘って、彼女に嫌われたくないという不安もあった。

大学二年の直樹にとって、実は初めての彼女だったのだ。

つきあいはじめた頃は、あまりセックスのことを考えなかった。一緒にいる時間が楽しかったし、女の子と映画を観たり、図書館で勉強したり、喫茶店でお茶を飲みながら経済の話をすることに新鮮さと喜びを味わっていたのだ。

彼女の体に興味を持ち始めたのは、つきあいはじめてどれくらい

経った頃だろうか。急に、彼女の豊満な胸が眩しくなった。彼女のすらっと伸びた細い足を見ていたら、触れたい衝動に駆られた。

腕を組んできた彼女の胸が、自分の腕に当たっていると感じたとき、心臓がバクバクしながら、余計に腕に力を入れている自分がいた。でも、それ以上は決して先に進まなかった。進めなかったのだ。いつごろか、ちよつとしたモヤモヤが直樹の頭と体を包み始めた。それを知ってか知らずか、彼女の方から突然きっかけを作ってきた。柔らかかった、とても柔らかかった、と記憶している。そして弾力があつた。手のひらに感じる未知の感覚・・・勿論洋服の上からだから、実際の肌の感触ではなかったにしろ、胸の膨らみの感触が、手のひらを熱く、敏感にしていた。

「はじめて？」

「えっ？ な、なにが？」

明らかに狼狽していた。

若い女性の胸を、たとえ衣服の上からとはいえ、手のひらで押し付けるのは、もちろん初めての体験だった。だが、領けなかった。

この年齢で女性を知らないのが恥だと思っていたからだ。身長百四十八センチの彼女は、下から身長百七十五センチの直樹を見上げて笑っている。

「どう？」

「どうって・・・」

池袋駅に着いた。乗り換えである。そして、直樹が彼女を送るのは、いつもここまでだった。

手を離し、何事もなかったかのように電車を下りてスタスタ歩く彼女の後姿を見て、今までの出来事が非現実的な出来事のように思えたのは仕方なかった。

このまま私鉄の改札の前で別れて、また何日間か別々の生活をして、次に会ったときには振り出しに戻る・・・

直樹はすんなりと「またね、気をつけて」といつもの挨拶ができないでいた。

「どうしたの？」

改札の前でいじいじしている直樹の頭の中など、彼女はお見通しだった。というよりも、そのときの彼女は、直樹の一言を待っていたのかもしれない。

「いく？」

「えっ？」

「行きたいんでしょ？」

「ど、どこへ？」

バカな問いかけだった。

「わかってるでしょ？ 別にあたしはどっちでもいいけど」

「そ、それは・・・」

「まだ時間あるじゃない？ 行きたいのなら行きたいって言うてよ」
煮え切らない直樹を、彼女は軽蔑することなく、むしろ楽しむように誘導していた。

だが、最後の男らしさは示してほしかったのだろうと思う。女からは誘わない。そんな古風な精神の持ち主だったのかもしれない。
か、あの時、彼女が実は直樹を求めていたのかどうかは、いまだにわからない。

確かに、彼女は処女ではなかった。

確かに、彼女は直樹を好きでいてくれた。

確かに、彼女は前の恋人とは直樹のために別れてくれた。

確かに、彼女はもっともっと親密になりたいと感じていたはずだ。
確かに、彼女はあまり進展しないふたりの関係に、直樹の本心を知りたいと思っていたはずだ。

「い、いこうか・・・」

微かに震える声で、直樹は彼女を誘っていた。

彼女は元気よく、「そうと決まったら早く行こう？ あんまり時間もないし」そう言って、直樹の手を握って引っ張って歩き始めた。
池袋駅の裏手のホテル街を、手を繋いで歩きながら、直樹は初めて東京に出てきた年寄りのようになっていたと思う。

「どこにする？」

男としての決断力のなさ、というよりは、経験不足が自分の判断でホテルを選べない情けない男を露呈してしまっていた。

「どこでもいいよ」

彼女は、勿論緊張などしていなかっただろう。

直樹は・・・心臓が喉元まで出掛かっているような、そんな心境だった。

「こ、ここでいい？」

「うん、いいよ」

どういつ判断基準で選んだのかは、今は忘れたが、軒を連ねるように並んだホテルの中から一軒を選び、思い切って入り口から入ったときの直樹は、きつと手と足が同時に出るような歩き方をしていたに違いない。

部屋を選び、エレベーターに乗って部屋の前まで行った。おぼつかない手で鍵を差込み、部屋のドアを開錠した。

「ど、どうぞ」

ドアを開けて彼女を先に入れた。

入るとすぐに扉があった。彼女が先に靴を脱いで揃えると、中の扉を開けて部屋の中へ足を踏み入れた。目の前に可愛い黄色のラブリソファがあった。左には大きなダブルベッドが、メインはこちらですよ、とばかりにどっしりと横たわっている。

「意外と広いじゃん」

彼女は持っていたバッグをソファに置いて言った。

意外と広い・・・何と比較して言ったのだろうか？ こういうところは初めてじゃないんだろつなと、余裕のない頭で、直樹はそんなことを考えていた。

彼女には、つい最近までつきあっていた恋人がいた。それは直樹にも伝えられていた。

勿論、その恋人との関係も。

それを承知で直樹は彼女とつきあっていたのだから。

直樹が彼女とつきあい始めた頃は、彼女はまだその恋人と切れていなかった。結果的には二股かけられていたことになるが、直樹には二股をかけられている気がしていなかった。何故なら、彼女の恋人は既に社会人で、郷里の静岡に帰っていたからだ。つまり、遠距離恋愛だった。

彼女が恋人に会うのは三ヶ月に一度程度。仕事で恋人が東京に来たときだけだった。そんな遠距離恋愛の寂しさのはけ口になっていたのが直樹だったのだ。

直樹の献身的な愛が、彼女の心を動かしたのだろう。彼女は、遠距離恋愛だった彼と、きちんと別れて直樹のもとにきたのである。それがちょうど一年前だったということだ。彼女がはじめて経験した相手は、その恋人だったらしい。彼女にとってはラブホテルなど珍しい場所ではなかっただろうし、こういうところに入れば次に何をするのもわかっていたはずだった。わかっていないのは、そう、直樹の方だったのである。

「お茶、飲む？」

落ち着かない直樹は、一旦ソファに並んで座ったが、立ち上がったミニバーのようなお茶のセットが置かれている場所へと移動した。

「あんまり時間ないよ」

「そ、そうだね」

直樹は引き返して、再びソファに並んで座った。

沈黙、手持ち無沙汰、緊張感、気まずい雰囲気、そして戸惑い・

どうしたらいい？

このあと何をしたらい？
いったいどうしたらいい？

直樹の頭の中は、直樹の意志に反してジャンボジェット機のエンジンみたいにフル回転していた。

「お、お風呂、入るよね？」

「もちろん・・・絶対入るよ」

「じゃ、お湯、入れてくる」

直樹は立ち上がってバスルームに向かった。

「シャワーでもいいよ」

背後から軽やかな声がかかる。鼻歌さえ聞こえてきた。慣れている。それに引き換え自分は・・・

「そ、そお？」

直樹は振り返って彼女を見つめた。明らかに顔が引きつっていた。彼女が立ち上がって直樹に向かってきた。

「先に入る？」

「い、いや、お先にどうぞ」

「そお？　じゃ、先に入るわね」

主導権は完全に彼女が握っていた。いつそのこと、自分はこういうところが初めてで、何もわからないので教えてくれと言ってしまえば楽だったのかもしれない。

変なプライドが邪魔をした。

余計な見栄が急に頭を擡もたげた。

彼女は直樹の横をすり抜けて、浴室の中へと消えていった。

直樹は高鳴った心臓と同居しながら、手持ち無沙汰についてテレビのスイッチを入れた。アダルトビデオの映像が突然写ると同時に、女性の喘ぎ声が聴こえて、慌ててテレビを消した。と同時に、浴室からシャワーの音が聞こえてきた。ますます心臓が高鳴る、と同時に股間が徐々に熱を帯びてくるのがわかった。

緊張していても勃起するのか・・・

呆れるのと感心するのとないまぜになった気持ちを大きな溜め息と一緒に吐き出すと、やがて規則正しいシャワーの音が途切れた。

次はオレの番か・・・

小学校の運動会で、徒競走の順番を次か次かと待っている心境に似ていた。

彼女が、石鹸の匂いと、満面の笑みと、心拍数を上げるに相応しい姿で直樹の前に現れた。

「先に頂いたわ。さあ、どうぞ」

「あ、ああ」

ここでも手と足が一緒に出ていたような気がする。浴室の扉までが異常に長く感じられ、浴室の扉が石像のように重く感じられた。いつも以上に念入りに、何度も何度も体を洗ったような記憶がある。洗い終わっても、まだ自分の体を点検している自分がいた。脱いだ下着を下だけ再び穿いて、その上にバスローブを身に着けて浴室を出た。

彼女はソファに座ってテレビを見ていた。

「おかえり」

場違いな挨拶も、直樹には緊張を解すきっかけにはならなかった。直樹は洗面台で歯を磨いた、彼女がさつきしていたように。やめるなら今のうちだ、まだ間に合う。

今日は帰ろうか・・・と言おう。怖気づいていた。

何度も何度も頭の中をこのセリフが駆け巡っていた。

いつもの倍の時間をかけて歯を磨いていたに違いない。

ソファに戻った直樹を、彼女は感心するように見つめて、

「随分丁寧に磨くんだね」と言った。

直樹はひきつった顔で苦笑するのが精一杯だった。

「あっちにいく？」

彼女がベッドの方を向いて言った。完全に、主導権は彼女が握っていた。直樹は言いなりだった。

「あんまり時間がないから」

「そ、そうだね」

「いよいよだ、いよいよなのだ。」

で、どうするのか？

彼女が先にベッドに身を滑り込ませた。そして、ほんのちよつと掛け布団に隙間を作って直樹を迎え入れる仕草をした。

彼女の気配りは完璧だった。

直樹は彼女の横に体を滑り込ませて、並んで横になった。

「緊張するね」

彼女の、決してセリフどおりでないこのセリフが、直樹をますます舞い上がらせていった。

真っ白だった、頭の中が真っ白だった。

石鹸の匂いと、彼女のほのかな香水の匂いが鼻腔を^{くすくす}擦った。

だが、それも緊張感を和らげる手助けにはならなかった。

彼女がゆつくりと直樹の方へ体を寄せてきた。

ここでも彼女がリードしてくれていた。

「はじめて、じゃないよね？」

突然、彼女が訊いてくる。

初めてだ、ラブホテルも、セックスも、キスさえも。

「えっ？ も、もちろん」

詰まらないプライドだった。

「何回目？」

「えっ？ あ、さ、三回目かな」

「そう。じゃ、いいね？」

何がいいね、なのか全くわからなかった。

「お願いなんだけど、ちゃんとつけてね？」

「も、もちろん」

コンドームのことを言っていることくらいはわかる。だが、もちろんコンドームなど装着したことは一度もない。

ゆつくりと、直樹は彼女を抱き寄せて唇に触れた。

もちろんキスも初めてだった。

心臓がばくばく悲鳴を上げていた。

心臓の高鳴りを彼女に気づかせないように、自分の心臓を彼女から離すように彼女の体を抱き寄せていった。

「脱がせて……」

うん……

声にならない返事をして、直樹はゆつくりとバスローブの紐を解いた。

バスローブを微かに震える指で捲つていき、左腕から脱がしていった。白い艶のある綺麗な肌と、薄いピンク色のブラジャーが目に飛び込んできた。

頭がくらくらしていた。

指がますます震えてきた。

バスローブを、彼女のさり気ない手助けを借りながらすべて脱がせると、ピンク色に統一された下着姿が視界に入った。

「これも？」

愚問を発すると、彼女が小さく頷く。

「このままだと、下着が汚れちゃうから」

彼女は、そう言つて体をちよつとだけ浮かせた。直樹は、震える手で彼女の下着をゆつくりと脱がせていった。横になつても崩れない隆起した乳房と縊れた腰、しっかりと閉じてはいるが細く綺麗な太腿に小さく隆起した彼女の秘部が直樹の視界に飛び込んできた。彼女は目を閉じている。微かに彼女の息遣いが荒くなっている。「あんまり見つめられると恥ずかしいわ」

甘く艶っぽい声だった。

直樹は、心臓がどこにあるのかわからなくなってしまうほど、全体がバクバクしていた。

落ち着け、落ち着くんた。

自分に言い聞かせる。

まだ・・・止められる・・・かも。

時間だから帰ろうかと言えばいい。

この期に及んで、まだ直樹は及び腰になっていた。

このあとに展開されるであろうなりゆきが、直樹にはまったくわからなかったのだ。

裸にしたあと、どうしたらいいのだろうか？

ちゃんと自分はアレを付けられるのだろうか？

いろんな不安が頭の中を駆け巡っている中で、直樹の生命はひとりで落ち着きをはらっていて、既に終わったあとのように静かな眠り

に入っていた。つまり、無反応が続けていたのだ。

女性の裸体を前にして、既に休息に入ってしまった男性自身、コントロール不能になってしまった直樹の生命、戦意喪失と自己嫌悪に陥ってしまった直樹の頭脳、全てが情けなさの不甲斐なさと、そしてなによりも先走ってしまった軽率さで、直樹は自分自身を消してしまいたい衝動に駆られていた。

逃げ出したい。

もっともつと研究と訓練と、そして下調べが必要だったと後悔していた。

直樹の最初の経験は、そんな感じで結局はなににもできないで終わったのだ。

情けない経験。だが、彼女は、優しく直樹を包み込んで、「次は焦らないように時間のあるときにこようね」と言って微笑んだ。

あのときの自分と今の自分。

どこが違う？

どれだけ成長したというのか。

確かに女性経験は違っている、女性の扱いにも慣れた、女性への考え方も、基本は変わらないまでも、年齢と経験で、やはり変化していると思う。

それなのに・・・

それなのに、今の自分はあるときの自分とどう違うのか？

今、直樹は目の前で煙草をふかふかとふかしながら、平気でアダルトビデオを見ている志子を見ながら、そのときの軽率さを思い出して、十数年経っても成長しない自身の無能さを、自分で軽蔑していた。

【第5章へ続く】

第5章 変化

第五章 変化

自分はいつたい何をしているのだろうか？

こんなことをして、何の得があるのだろうか？

一時の快楽は得られるかもしれない、いや、それだって確実に、何の後遺症もない確実な快楽かどうかはわからない。

それに、そんな快楽が欲しくて自分は生きているわけではないはずだった。

セックスを否定はしない。セックスだけの関係を軽蔑しない。

だが、自分が今、本当に求めているのは、そんな関係が長く続く退廃的な男女関係ではなく、セックスをしなくても信頼し合える男女関係ではないのか。

いや、なにを甘いことを考えているのか。

セックスのない愛情があるのだろうか？ 男女がセックスをする。それはそれとても重要じゃないか。セックスだけの繋がり、体だけの信頼関係。別にいいじゃないか。だが、それもふたりの信頼関係を築き、長いつきあいの中でふたりを結び離れないしっかりした絆を作るための、ひとつの手法、大切な経緯、コミュニケーションだと、直樹は信じていた。

今、目の前にいる志子が考えるように、やりたいときにやりたい相手とやる、その対象としか考えていない存在で、果たして続けていかれるのだろうか？

疑問だった。

こんな女に深入りしない自信はあった。

志子にはきつと本気にはならないだろう。

彼女の直樹に進言した懸念は、確実に守れる自信はあった。たとえ、体の関係が出来上がったとしても。だが、だからといって彼女の言っただのセックスフレンドで関係を作り、続けていくことに、直樹自身は抵抗があった。

じゃあ何故ここにいるのか？

何故彼女のなすがままについてきたのだろうか？

「あんまり時間ないんじゃないの？」

志子は、煙草の吸殻を灰皿に押し付けながら、いつまでも行動に移さない直樹に対してイライラするかのよう問いかけてきた。

「やる気ない？」

「そんなことはないけど」

「あたし、無理矢理誘っちゃったかなあ？」

「いや、そんなことはないよ」

「それならいいけどお、ちよつと気になった」

気持ちが萎えていくのを止められなかった。志子が煙草を吸うことも今知った。先日会ったときはすっていなかったのだ。

イメージが崩れる。理想から懸け離れる。直樹のもっとも嫌悪する女の代表のような性格をしている。これから志子を抱くのはきつと至難の業だろう。使い物にならないはずだ。そして、それ以上に彼女を満足させることなんてできるわけがなく、このまま強行すれば確実に次はない。

それもいいかもしれないが・・・

だが、可愛い。美しい。そして、とても素晴らしいプロポーションを持っている。

はあ、大きな溜め息が、それでも彼女に聞こえないように気遣いながら、全身から抜けていくように出た。

「お風呂入ってくるね」

志子はさつさと服を脱ぎ始めた。止めるなら今だった。止めたかった、いや、脱ぎ始めた彼女に「やめよう」と言っのは失礼かもしれない。

風呂くらい入ってもどうってことない。風呂だけ入って帰ればいいのだ。

志子は、浴室のドアも閉めずに、直樹の視線もお構いなしに脱ぎ始めて、あっという間に全裸になると、シャワーを浴び始めた。

彼女は完全にその気になっている。

志子はスレンダーだが、バランスの取れた綺麗な体をしていた。胸も、服の上からでは気づかなかったが、かなりふくよかだった。三十代には見えないほど脂肪がなく、乳房もお尻も垂れてはいなかった。

どうする？ いいのかこのままで？ 自問自答していた。

ここで、やっぱりやめるわ、と言えば確実に彼女を傷つけることになる。

いくら愛情や信頼関係がない気楽な関係だったとしても、彼女を傷つけていいわけがない。十数年前の、まだ未熟だったあの頃とは違うのだ。だが、決定的に違うのは、直樹が覚悟を決めさえすれば、次に何をしたらいいのか、何をするべきか、そして平均点以上の評価を得て、とりあえず今日のこのときを無難にこなしてすり抜けるだけのテクニクと経験はしてきていた。

その気にさえなれば・・・

「出たよ」

結論の出ないまま、彼女はシャワーから出てきてしまった。

彼女はバスタオルを巻いただけのスタイルだった。

「オレも入ってくるよ」

直樹はすかさず浴室に向かった。

覚悟を決めるか、ここまでできてしまった責任もある、というのは言い訳かもしれない。

やっぱりどこかで志子とやりたいという気持ちがあったのだろう。セフレでもいい、こんな都合のいい相手はそうそういないのだ。やっつけばいい、そう囁く心があった。

気持ちを切り替える！

都合のいい相手が現れたのだ。罪悪感など憶える必要はない。相手が望んでいることなのだから。

三十二歳の決して年相応に見えない若々しい女性を目の前にして、好きにしたいと体を投げ出して、抱く気がしない男がいるとすれば、それは普通ではない男か病気に違いない。終わったあとに、空しさしか残らないのではないだろうか、という懸念があったのだが、直樹は体を洗いながら、ここまで来たのだ、もう止まらない、いや止めたら失礼だ、と思うようにした。

三十数年の人生の中で、つきあっているわけでもなく、これからつきあうつもりも特になく、お互いによく知らないうちに、体の関係に踏み切ったケースは、ただの一度もなかった。それが自慢だとは決して思っていない。むしろ、付き合いだして体まで許しあった仲になっていながら一年ともたなく別れてしまう自分の不甲斐なさを反省するべきかもしれない。

「愛のないセックスはしない性質たちでね」なんて、よく飲み屋で口説き文句に使っていた自分が、今回の事で終止符を打つ羽目になることを、実はちよつとした冒険のように感じているのも確かだった。

ここからどう発展するのだろうか？

いや、彼女は、こういう関係の距離の置き方には百戦錬磨だろうから、感情のコントロールは問題ないはずだ。

では自分は？

未知の世界であることは確かだ。彼女を抱いたことによつて、彼女への想いが深まって、本気になってしまふ可能性も皆無ではない。本気になる？ 目の前のこの女に？

直樹は首を傾げた。

本気になるか？

直樹はふと、昨年の暮までつきあっていた宮下美登里の顔を浮かべた。

宮下美登里。

知り合ったのは一昨年の初夏に近い六月の初めだった。宮下美登里は三十三歳のバツイチだった。杉山直樹よりも二歳上だ。小学校一年生の娘がひとりいる、色気をあまり感じない男勝りの女だった。当時、直樹が勤めていたIT関連会社のプログラマとして美登里は中途入社してきた。くたびれた紺のスーツを着て、女性らしい雰囲気も、艶めかしい空気も全く感じない女だった。

身長はおそらく百五十センチちょっとで、体つきはスリムとは言えないが、太ってもいない。だが、だからといってナイスバディではなく、胸もせいぜい頑張ってCカップくらいのものだっただけと思う。但し、二年前に離婚してから、働きながら子育てをしてきただけに、野暮ったさとか、専業主婦にありがちな実年齢より老けて見えるということとはなかった。三十三歳にはとても見えなかった。

化粧は厚くもなく薄くもない、それなりに上手かったし、着ている洋服のセンスも、スーツ中心とはいえ、悪くはなかった。

直樹は、今はコンサルタント会社の営業マンをしているが、今年の初めまで、その会社で営業主任をしていた。今の会社は引き抜かれたのだ。直樹が取引先から依頼されたプログラミングの仕事を、システム開発部に投げたときに、担当として打合せをしたのが、中途入社したばかりの宮下美登里だったのだ。

何度も打合せをした。顧客のところにも一緒に出向いた。

仕事以外の話もたくさんした。そんな中で、彼女の年齢やバツイチなことや子持ちであることなどを話してくれたのだ。

知り合って一ヶ月ほどが経過した。

直樹は美登里に惹かれ始めていた。

美登里に惹かれたのは、彼女が気持ちいいほどはつきりモノを言う性格だったことと、屈託なく笑った笑顔がとても魅力的に感じた

からだった。

最初にデートに誘ったのは直樹の方だった。

彼女は、仕事が終わると子供を実家に迎えにいかねばならず、仕事が終わってから食事に誘うのは至難の業だった。

「今度飲みに行こうね」という社交辞令に毛が生えたようなセリフは、社内ですれ違ったびに挨拶代わりにかけていた。

「いつにします？」

と、彼女の方から問いかけてきたのは、直樹が何十回目かの挨拶代わりを吐いた瞬間だった。

「えっ、いつでも・・・いいけど」

直樹はびっくりしていた。いつものように、さらっと聞き流されるだろうと思っていたからだ。

「じゃ、今週の金曜あたりは？」

三日後である。

「オレはいいけど、お子さんを迎えにいくんでしょ？」

「予めわかっていれば、実家に預けちゃって、そのまま実家に泊めちゃうから大丈夫ですよ」

美登里は、全く問題ないといわんばかりの笑顔で答えた。

「そう。じゃ、金曜日にしましょうか」

少なからず、直樹は心が躍っていた。それにしても、今までは無反応だったのに、何故、今回に限って食いついてきたのだろうか。

直樹には、それが不思議でなかった。

今まで直樹が美登里を誘っていたのは冗談はなかったし、知り合って一ヶ月の間で、美登里に惹かれていったのも事実だ。

だが、好きだとか愛しているとか、そんな重い感情は、まだなかった。ただ、いつも挨拶をする可愛い女性と、たまには飲みたい、そんな気持ちだけだった、と思う、そのときは。

「あなたはあたしに何て言っただか憶えてる？　そう、あなたはあたしとつきあってる間中、何かあったら責任は取るからって言っただのよ。憶えてるでしょ？　もちろん、それが妊娠したときのことを意味してることくらいあたしにもわかってるわ。結婚を前提につきあっていたわけじゃないけど、あなたのその優しい言葉が嬉しかった。何度も言うようだけれども、あたしは結婚するつもりはないってあなたに言ってたわ。それを前提につきあっていたのよ、それは間違いないの。あたしの心と、そして体の隙間を誰かに埋めて欲しかっただけ。そんなときにあなたが都合よく現れて、あなたは完璧なまでにあたしの心と体を埋めてくれた。それには感謝しているし、あなたを失いたくないと思った。そう、あたしはあなたを失いたくないのよ。あなたを放したくないの。だから、だから、こうして約束違反かもしれないけど、結婚したいって思ってしまったのよ。それって、責任を取るって意味にならないかしら？　あなたは、あたしの心を妊娠させてしまったのよ。それには責任を取る必要があると思わない？　勝手な言い分かしら？　身勝手な屁理屈かしら？　あなたが悪いのよ。あたしをこんなにも夢中にさせておいて、あなたは一人で勝手に冷めていってしまうなんて・・・ほんと、女心がわからない男だわ」

美登里との食事を楽しみに感じた矢先、直樹の脳裡に忌むしい呪いのようなセリフが蘇ってきていた。

【第6章へ続く】

第6章 一線

第六章 一線

食事の約束まであと三日、只の食事なのに、妙にウキウキする自分がいた。

それもそのはずで、約一年近く、直樹には恋人がいなかったのだ。水商売でもなく、会社の部下でもない女性との食事は、まさに久しぶりだったといえた。

宮下美登里。

会社で必ず一度は顔を合わす相手だった。

恋人というわけでもなく、ただの同僚に過ぎないのに、何故か心が躍っている自分がいた。

それは、直樹が美登里に惹かれつつあるということの意味していた。自分に嘘をつくつもりはない。

まして、自分を偽って誤魔化す理由もなく、素直に、正直に自分の気持ちを確認したとしても、この時点で彼女に対して好きと確実に言えるよう菜感情はなかったといえる。

でも、心は躍っていた。

食事に誘った翌日に、廊下での通りすがりに、まずメールアドレスと電話番号を訊いた。

待ち合わせの場所と時間は、メールで伝えると言って・・・
彼女は簡単に教えてくれた。

アドレスを知ったあと、直樹は美登里の携帯に、まず何が食べたいかをメールで尋ねた。

これもコミュニケーションの一環だった。

『食事はどこに行きましようか？』

意外にセオリーどおりに攻める。

『お任せします』

美登里は控えめだった。

『好きな食べ物は何ですか？』

『特に何でも食べるけど、強いて言えば和食かな』

『じゃあ、和食の美味しい店に行きましよう』

『じゃあ、考えておきますね。おやすみなさい』

『楽しみです。おやすみなさい』

メールの文章が丁寧になるのは無理もない。

あと二日。

『おはよう。今日も仕事 頑張つていきましょう。ところで、お酒は強かったですよ？何が好きですか？』

『おはようございます。お酒はそんなに強くはないです。何でも飲めますけど、やはりビールが多いです。最近は焼酎にも凝つていますが。』

『では、和食で焼酎の美味しいお店に行きましようね。ところで、お子さんの件は大丈夫なのでしょう？』

この時点で、直樹は一軒の店を頭に浮かべていた。

あそこなら彼女も満足するに違いない。

『子供は実家に預けることにしました。そのまま実家に泊めますので、時間は自由になります』

確か、美登里の住んでいるところは千葉県の方だったと記憶している。

『ちなみに終電は何時ごろですか？』

『場所にもよりますが、東京駅に十二時なら間に合います』

終電まで引つ張るのは失礼であることは十分承知していた。終電の時間を尋ねたからといって、それまで引き止めるつもりはない。

ファーストタイムに深入りはしないと決めていた。

一回目のデートは必ずそのまま家に帰す、それが直樹のこれまでずっと守り続けてきた行動だった。

『そんなに遅くならないようにしますから』

『気にしなくていいですよ。娘は実家ですから。翌日の土曜日は、娘のバレーがあるので、それまでに帰れば大丈夫です』

翌日の朝まで・・・？

冗談に決まっていると知りながらも、悪い気はしなかった。

だが、酒の弱い直樹は夜通し酒を飲むつもりもなく、彼女の申し出もリップサービスとして捉えていた。

このときは・・・

直樹は、食事の約束をしてからというものの、美登里に対する感情が徐々に変化していることに気づいていた。

スキになり始めている、直樹はそう感じていた。

しかも、この時点での美登里の直樹に対する感情がどうだったのか、直樹は彼女に訊いたことがないからわからないが、満更ではないことは確かだった。

そしてその日の夜、直樹は妙案を思いついた。

ひとつの賭けでもあったし、今後のふたりの関係を左右するものでもあった。

そして翌日、食事の前日を迎えた。

今日もメールのやりとりをする。

同じ会社に所属していても、仕事場のフロアが違うので、滅多に顔を合わせることはない。まして直樹は営業だから外出していることが多く、逆に美登里はプログラマだったので、自席から離れることは少なかった。

自然と、ふたりの連絡ツールは携帯電話のメールになる。

『銀座のとてもお刺身の美味しい焼酎バーにお連れしましょう』

『ほんとですか？ 楽しみです』

『ところで、これは提案なのですが・・・』

『何でしょうか？』

と、美登里から返信がきたところで、直樹は一瞬躊躇った。無謀な提案をしようとしている。いや、美登里が気を悪くして、そのまま明日の食事がキャンセルされる可能性もある。

どうしようか・・・

しかし、直樹には根拠のない自信が芽生えていた。

断わられないだろうという自信。

『気に入らなければ、気に入らないと遠慮なく言ってくださいね』

『はい』

『当日は、ゆつくりと過ごしたいと思います。あまり時間に追われて忙しく飲むのは好きではないので』

『同感ですね』

『仕事が終わるのは何時になりますか？』

彼女が毎日遅いのはよく知っていた。日頃は午後八時を廻ることは珍しくない。

だが、午後八時に会社を出たのであれば、一緒に食事を楽しむ時間はせいぜい二、三時間だった。

考え方によつては丁度良いといえなくもないが、しかし、それでは二軒目はないと考えなくてはならない。

一軒で帰すか・・・

だが、子持ちの彼女をそうそう何度も食事に誘えない。それは彼女も十分に承知していることだったので、こういう機会にゆつくりしたいと、彼女自身も望んでいたことは確かだった。

それを直樹は逆手に取った。

『七時には出られると思います』

『では、七時に駅前のドトールで待っています』

『わかりました。で、提案というのは？』

直樹は、それでも一瞬躊躇った。

まだ早い・・・早すぎるかもしれない・・・いや、絶対早いに決まっている。

無謀な提案だ、絶対に。

ここで、美登里が気を悪くするか、警戒してしまったら、きっと次回はない。

いや、次回どころか、今回の食事も断ってくるに違いない。だが、直樹には根拠のない自信が、やはりあった。

天性のカンかもしれない。

『銀座の焼酎バーのあと、ゆっくり話せるように、シティホテルの部屋をブッキングしようと考えています。ルームサービスでワインでも飲みながら、ゆっくり話したいと思いますが、ご迷惑でしょうか？ そのまま、貴女だけ宿泊して貰っても構いませんよ』
返事に少しの間があった。

とんとん拍子にメールのやりとりがあったのに、この提案を伝えた後、返事がとまった。

やはり失敗した？

気分を害した？

やはり早すぎた・・・

無謀だった・・・

相手を軽く見ているように思われた？

キャンセルされる・・・

後悔の念が直樹の全身を襲って、自分の愚かさを身に染みて感じ始めた頃、

『お任せします。でも、泊まるときは一緒がいいです』

と、一言だけ直樹の携帯電話にメールが送信されてきた。

三十三歳の結婚歴がある女が、三十一歳の独身男に食事に誘われ、そのあとにシティホテルに部屋をブッキングしてあると言われて、何もなく只単に飲むだけだろうと信じているはずもなく、そこで行

われることを彼女は全面的に受け入れたと解釈しても問題ないと、直樹は思った。

それとも、純粹に時間を忘れてゆっくりとお酒を飲んで、なにもしせずに男と一緒にシティホテルに泊まれる。そう美登里は信じていたのだろうか。

離婚して一年あまり、その間に美登里に男関係が全くなかったとは思わない。

今現在だって、男がいらないとは限らない。

だが、直樹の申し出を受け入れたことで、たとえ現在つきあっている男がいたとしても、その関係は希薄になっているだろうと、直樹は予想した。

チャンスだ。

まさか、美登里が男を食い潰す女だとも思えない。

ということは、美登里も直樹との大人の関係を望んでいる？

少なくとも、多少はそれを望んでいることは確かだと思われた。

でなければ、これほどあっさりと受け入れるはずはなかった。

直樹は、自分の提案が受け入れられたにもかかわらず、あれこれと考えてしまっていた。

いいのか？ 本当にいいのか？

だが、女の気まぐれをいやというほど見てきた直樹にとって、この返事が、直樹が思っているような状況になる確実な裏づけにはならないことを知っていた。

当日。

予定よりも十分遅れでドトールコーヒー店に現れた彼女を、直樹はタクシーに押し込み銀座の一丁目に向かった。

美登里は、相変わらずいつもと同じ紺のスーツを着ていた。若干スーツに疲れが伺えた。

ジャケットの下は、眩しいくらい白く、胸元に小さな花の模様を模
つてある、可愛いブラウスを着ていた。

美登里には、こういう隠れたところにちょっとしたセンスのよさが
あった。

タイトスカートの下はベージュのストッキングだが、それもちょっ
とした高級感のあるものを着こなしていた。

店は七時三十分に予約を入れてある。

「暖炉」という小さな焼酎バーだが、店内の清潔感が溢れる装飾と、
和風にアレンジされたイタリアン風の料理派絶品だった。

そして、この店の一番のお勧めが、三点盛りと名付けられている、
鮪と中トロと大トロの盛り合わせだ。

それぞれが四切れほどの、二人で食べるには丁度良い量で盛り合わ
せられた、この三点盛りは、店の人気商品で、遅く行くと品切れに
なっていることが多い。

これで千円丁度というから驚きだった。

オーナーに言わせると、原価で出しているそうで、利益が出なくて
もいいから客に食べて欲しいという願いがあるらしい。

直樹は、事前に電話で席の予約と、勿論三点盛りの注文を先にして
おいて、店に向かった。

タクシーの中では専ら仕事の話題だった。

前職でもプログラマだった彼女は、今の会社での仕事に少しも戸惑
いがないが、前職よりも開発するプログラムの内容が難しいとこぼ
した。

仕事の話を始めると、機関銃のように意見と愚痴と問題提議がごち
やまぜになって彼女の口から発せられた。

二十分ちよつとで店に着いた。

この店はオープン当初から通い続けている店で、マスターとも馴染
みだった。

マスターの志賀は、久しぶりの直樹の姿に心から歓待してくれた。

四人掛けのテーブルに案内された直樹たちは、ビールで乾杯したあ

と、名物の三点盛りとぷりぷり海老のマヨネーズ和え、豚の角煮、水菜とジャコのしゃきしゃきサラダを頼んだ。

どれも自慢の料理たちだ。きつと満足するに違いない。

彼女はビールをとても美味しそうに飲んだ。

店についてからの会話は、専ら家庭の話や趣味の話だった。

敢えて仕事の話は避けたのだ。酒を飲みながらの仕事の愚痴や上司への文句ほど興ざめすることはない。

直樹は、一旦会社を離れたら、会社のことは忘れるタイプだったのだ。

落ち着いた店内の装飾は、オーナーのセンスのよさを物語っていた。自ずと気持ちも落ち着いてゆく。

直樹は、生ビールのあと、しそ焼酎のたんたかたんをロックで注文したが、彼女は三杯目のビールに口をつけていた。

余程ビールが好きらしい。

彼女の食べっぷりは、お世辞でもいいとはいえなかった。

「口に合わないかな？」

心配した直樹が美登里に訊いた。彼女は慌てて首を振って、

「とっても美味しいですよ。あたしは、飲むと食べない性質なんで・

・ごめんなさい」

「それならいけど、美味しくないかと心配したよ」

彼女の言っていることが嘘ではないことは、その後の付き合いの中で立証される。

彼女は、アルコールが入ると極端に食べなくなる。

それは、アルコールの味を食事の味で消したくないからだという。

つまり、食べることより飲むことを好む酒好きということだ。彼女の酒好きは、量よりもむしろ質にあったようだ。

もちろんビールに極端な違いはないが、ビールの味を大事にするあまり、食事を控えて最低限の分量しか摂取しないところは、彼女の酒に対する思い入れだと思う。

「再婚はしないの？」

彼女が四杯目のビールを飲み始めた頃、直樹は話題を変えた。タブーかなとも思ったが、他に話題が思い当たらなかった。

「相手がいないし、結婚はもう懲り懲りかも」

彼女の離婚の原因は、夫の浮気らしい。離婚は三年前だ。

「まだ若いのに、いくらでもやり直しがきくじゃない？ 探せばいいじゃない」

「男って、絶対浮気するでしょ？」

「どうかな」

直樹は言葉を濁した。

直樹は、俺は浮気はしない、と言葉に出せば白々しいし、するといえ、やはり彼女の不信感を買うことになる。だから直樹は黙っていた。

「彼女は？」

直樹が独身であることは、既に彼女に伝えてある。

「いたら、君を誘わないでしょう」

自分は浮気をしない男、ということを婉曲に伝えている言い回しだった。

「それはどうかな。男はみんな一緒でしょ」

男への不信感、浮気に対する嫌悪感、彼女は過去に余程辛い思いをしたのだろうか。

「少なくとも、つきあってる人がいる間は、他の女性を誘ったりはしないよ。ま、気持ち離れてたらわからないけど」

「二股かけたことはないんですか？」

「そんなに器用じゃない」

「浮気は？」

「遊びの恋愛はしないから」

その場限りでは女を抱かない、と言いかけて言葉を飲み込んだ。

美登里がこのあと直樹の考えどおりついてきて、直樹に抱かれるようならば、直樹は遊びで女を抱くことになる。

いや、そうなくても、直樹にとって美登里の存在はもはや遊びでは

ないのだ。

「結婚はもういいけど、恋人は欲しいなあ」

彼女はほんのり紅くなった頬を更に赤らめて直樹を覗きこむように見た。

自分に何かを望んでいるのだろうか？

自分に気があるのだろうか？

それとも・・・

一時の寂しさや切なさから、それを埋めてくれる相手が必要なのだろうか？

最近遠ざかっていた女としての快楽を、直樹に求めようとしているだけののだろうか？

浮気を否定し、男の本性にうんざりしているかと思えば、心からの寂しさを埋める対象を探す。

矛盾しているようで、でも、それが人間の本性であるような気がして、直樹は美登里に親近感を覚えた。

「いないの？」

「別れたわ。半年前に」

「そっか」

別れ話の真相は聞かなくてもわかる。間違いなく、男の浮気が原因だろう。

「年下だったの」

彼女は、聞いてもない過去恋愛を語り始めた。

「どこで知り合った？」

「ナンパ」

「へえ」

直樹は心底驚いた。とてもナンパでついていくようなタイプではなかったからだ。

「きつと・・・」

「きつと？」

「きつと、淋しかったんだと思う。旦那に浮気されて、どうしても

許せなくて、離婚決めて、男性不信になって、恋愛に臆病になって、でも、やっぱり淋しくて……」

前の恋愛が終わって半年……

直樹も、寂しさを埋めるための存在なのだろうか……

「あたしを軽蔑した？」

直樹は黙って首を振った。

本心だった。彼女の、そのときの気持ちを少しだけ理解できるような気がした。

「結婚は懲り懲りだけど、恋はいつまでもしていたいし……」

「し？」

「うっん、何でもない」

彼女は黙って、焼酎のグラスを手を取った。

二時間が過ぎた。

酒の弱い直樹は、生ビール一杯と、たんたかたんのロック二杯で酔っていた。酔っていたといっても、泥酔している訳ではない。女性をエスコートできるギリギリの酔い方だった。

彼女は、生ビール四杯と、比較的強い焼酎のロックを一杯飲んでいった。

ほんのりと顔が赤かった。だが、顔の赤み以上に彼女が酔っていることを、直樹は知っていた。

「そろそろ場所を変える？」

彼女は黙って頷いた。

勘定を済ませて店の外に出た直樹は、彼女に向かって、

「大丈夫？」と訊いた。

しつこいようだが、この「大丈夫？」は、最後の美登里の意思の確認だった。

「うん」

美登里は、足取りがおぼつかなく、直樹に寄りかかるような感じだったが、返事はしつかりとしたものだった。
女を酔わせて連れ込むわけじゃない。

直樹は、自分に言い聞かせながら、目の前をゆっくりと通り過ぎようとしていたタクシーを止めた。

直樹は、美登里がとてもいとおしく思えた。

単なる食事の誘いではない。ただ単に、ゆっくりと飲みたいから、彼女をシティホテルに誘ったわけじゃない。

はつきりと自分の気持ちがあった。

オレは、美登里が好きになっている。そして、心から美登里が欲しいと思っている。

開いたタクシーの中に、ゆっくりと美登里を導いて、自分も隣に収まると、運転手に向かって、予約したシティホテルの名前を告げた。美登里は、微笑みながら、ゆっくりと直樹にもたれかかってきていた。

そして約一時間後。

美登里は、直樹が今まで見たことがないほどの可憐さと、それでいながら妖しい目で直樹を見つめ、成熟した女の引き締まったからだで、男を惑わす濃厚な色香を漂わせて、直樹の腕の中で、全ての思考を吹き飛ばすかのように、激しく大胆に乱れていった。

【第7章へ続く】

第7章 誤算

志子が少し苛立ち始めた。

それは当然のことだった。

ここに入った彼女の目的はひとつしかなく、それをなかなか履行しない不甲斐ない男が隣にいる。

おそらく、彼女にとってこんな男は初めてだったに違いない。

自分を誘う男は、例外なく自分と寝たい男であり、それに応じた自分は、自分の目に適った合格者^{かな}だった。

その合格者が権利を主張しなかったことなど、今までに一度もなかったのだろう。

それなのに・・・

ホテルに入れば、男は必ず押し倒してくる、そんな固定観念が志子の中にはあったはずだ。

目の前にいる男は、決して女性経験がないわけではなく、少なくともその気になっている女を満足させられる術を知っているはずなのに、どうして躊躇っているのだろうか？

中途半端な行動、はつきりしない優柔不断さ、いや、彼女が本当に苛立っているのは、ここまできて自分を抱こうとしないのは、実は自分に性的魅力がないからではないだろうか、という屈辱的な思考が働いて、それが無性に彼女のプライドを傷つけているのかもしれない。

志子の苛立ちはよくわかっていた。

だが・・・

焦らしているわけではない。

まして、緊張しているとか、遠慮しているとか、そういった気持ちは直樹には全くなかった。

何故ここまで来ていながら、自分が目の前で裸体を晒して、今か今かと抱かれるのを待っている女を、抱き寄せられないのか、理由は明白だった。

愛のない空虚なセックス。

その場限りの快楽だけを求めたセックス。

たまには違った男に抱かれてみたいと思う遊び心に満ち溢れたセックス。

それがわかっていながら、自ら進んでホテルに誘い、部屋の中に入ってきたことへの恥辱、自分への憤怒、情けなさ、そして、色情的で墮落した思い上がり……

目の前で自分のからだだけを求めている女を、素直に抱く気にはなれない自分がいた。

もしかしたら……

もしかしたら、あの子の美登里のように、かけがえのない女になるかもしれないじゃないか、と思ってもみた。

目の前の志子を、これから先絶対に愛さないと誰が言えるだろう・

・

あの子の美登里のように……

いや、有り得ない。

美登里とは明らかに状況も、彼女の男への捉え方、特に直樹の存在意味に違いがあつて、美登里のときのように決してならないことを、直樹は十分に承知していた。

そして、この女を真剣に愛してはいけないことも理解していた。

抱けば、直樹のように弱い心の持ち主は、志子を愛し始めてしまつかもしれない。そうならないと自信を持っていえない自分がいた。

このまま、志子を抱いてよいものなのか、この期に及んでもまだ

直樹は迷っていた。

最初のデートで体の関係まで進んだことは、三十一年生きてきて初めての経験だった。

巧くいった、と思った。相手は結婚を望んでいないのだから、責任を取らされることはない。

宮下美登里という女にも、直樹に不満はなかった。年上とつきあうことにも抵抗なかったし、そもそも二歳の違いは年上とは言えない年齢差だ。

華奢だとおもっていた美登里の体つきも申し分なかったし、バツイチとはいえ、社会人として外に出ている彼女は、所帯じみていなかった。

おまけに、結婚を迫られて、突然、子持ちになることはないのだ。それでいて、体の関係もある恋人が出来た。直樹にとって、こんなに都合のいいことはなかった。

直樹は独身主義者ではなかった。結婚は、自然の流れでその気になつたらすればいい、程度に考えていた。だが、相手が結婚を前提に迫ってこれると萎縮するタイプだった。

それで二十代に何度か失敗もしている。

今回は、それが無い。なにしろ、相手は、結婚は懲り懲りだと言っているのだ。気楽につきあえばいい。自分の時間を維持しつつも、ふたりの時間を共有すればいいのだ。

直樹は、決してのめりこまない恋に満足していた。

だが・・・計画が狂った。

本気になったのは、むしろ直樹の方が早かったかもしれない。

抱いたからでは、けっしてない。

彼女の本質が、抱いたことによって近づいて、正面から受け止め

ていつて、気づいたらかけがえのない女になっていた、ということのようだった。

そして、

それはきつと、間違いなく、彼女も同じ気持ちだったはずだ。

一線を超えたあと、ふたりは急速に接近した。

「今日は、仕事が終わるのは八時過ぎるわよ」

「じゃ、メシはまた今度にしようか」

食事の誘いに、彼女は申し訳なさそうに応えた。

相変わらず彼女の仕事は忙しく、相変わらず一人娘を迎えに行く生活を繰り返していたので、仕方なかった。

直樹が食事に誘っても、三回に一回行くかどうかいいところだった。しかも、直樹も忙しいので、毎日誘うわけではなかったから、自然とふたりが会える日は、月に一度か二度がいいところだった。

それでも直樹には不満はなかった。

「いつになるかわからないよ」

彼女はちよっぴり不満そうな顔をする。

しょうがないだろ、そっちが忙しいんだから・・・という言葉を飲み込んで、

「近いうちに、また行かれるさ」

「それでいいの？」

美登里の口調は、まるで、自分から断っておきながら納得できないといわんばかりの問いかけだった。

「仕方ないじゃん。仕事が忙しいなら我慢するしかないもんな」

直樹は、嫌味でも皮肉でも諦観でもなく、素直に言った。

「そう？」

と、美登里が少し考えたのち、

「うちにくれば？」

「えっ？」

「いや？」

彼女が直樹を覗きこむ。

「うちって・・・美登里のどこ？」

「ほかにうちはないけど」

「そっだよ」

苦笑する。

本気・・・なんだろうなあ、と思いつつ、つまり泊まりに来いということを彼女は言っているのだ。何故なら、仕事が終わってから、美登里の家に行くということは、千葉県の柏市に住む美登里の自宅から、その日のうちに横浜に住む直樹の自宅まで帰るのは不可能だったからだ。

「いやならいいけど」

「そんなことないけど」

「けど？」

「いや、突然なんで、いいのか？」

「いいから言ってるんじゃない」

「そっだよ」

直樹は、苦笑いをしながら少し考える表情をした。

結論は出ている。断る理由はどこにもないのだ。

「無理にとは言わないけど」

「ほんとにいいのか？」

「そのかわり、明日の朝はあたしを起こしてよね。あたしは朝弱いんだから」

直樹は曖昧に頷いた。

「メシはどうする？」

「陽子を迎えにいかなきやならないから、真っ直ぐ帰るわ」

「そか・・・」

「作ってあげるよ、うちで一緒に食べよ？」

一緒に食べよ、と言った彼女の表情が、妙に少女っぽくて、可愛らしくて、健気に見えた。

直樹は、心臓が音を立ててドキドキしているような感覚を憶えた。

「何が食べたい？」

「何でもいいよ」

こんな会話は久しぶりだ、と思いつつ悪い気はしなかった。

「何でもいいっていうのが一番困るんだけどな」

「それもそうだな」

直樹は少しだけ考えたあと、

「簡単で手間がかからなくて、その中で一番得意なものっていうのは？」

「わかったわ」

彼女は直樹に悪戯っぽい微笑みを見せた。

何かを思いついた顔だった。

「でも、そんなに上手くないよ、料理。あんまり期待されても困るけど」

「じゃ、ちよつとだけ期待することにする」

直樹は微笑み返した。

「ありものでいい？」

「任せる」

「嫌いなものは？」

「牡蠣・・・は絶対に食えないよ」

「へえ、一緒だね。大丈夫よ、あたしも娘の陽子も牡蠣は苦手だから」

それに今は牡蠣の季節ではない。

「それと・・・」

「何？」

「誘っておいて、こんなことを言うのもなんだけど・・・」

「何？」

「部屋、汚いよ。掃除してないから、散らかってると思う」

直樹は苦笑して、

「料理作ってる間に、オレが掃除してやろうか？」

彼女は首を振って苦笑した。

「掃除は得意なんだぜ」

「近所迷惑だつて」

「それもそうだな」

直樹は、仕事が終わったなら携帯電話を鳴らす約束をして、その場は別れた。

初めて彼女の家に向かう、そのことに少なからず高揚している自分があった。

宮下美登里は二十五歳で結婚した。

大恋愛だったらしい。

相手は二歳年上の、同じ職場の先輩だった。ふたりは同じ会社でプログラマをしているときに知り合った。結婚を決める一年前のことだった。一年間、喧嘩を繰り返しながらも、強固な愛を育んできた、と美登里は信じていた。

プロポーズは、もちろん夫となる川井慎二からだった。

「決して後悔はさせない、ついてきてほしい」

純粹で、力強い目に、美登里はこの人しかないと感じたという。夫の慎二は言葉どおり優しくかった、愛してくれた、頼りになった。結婚してよかったと思った。この人でよかったと安堵していた。自分は本当に幸福だと信じて疑わなかった。

結婚して二年後に子供ができた。妊娠をきっかけに、美登里は会社を辞めて、家庭に入った。

これも美登里の希望で、二年間は仕事をしていたいと言ったからだ。

翌年、可愛い女の子が生まれて、陽子と名付けた。

幸せの絶頂だった。

夫は子供を心から愛し、妻を愛しみ、家庭を大切にしてくれた。

子供が一歳のとき、ちょうど結婚四年が過ぎたときに、夫の慎二が独立をした。

美登里の人生が狂い始めたのは、ちょうどこのときからだったような気がする。

慎二はＩＴに先駆けて、半導体の取り付けやメンテナンス専門の会社を起業した。社員数五名、資本金一千万円の小さな会社だが、彼の人脈と信頼で仕事は順調に入ってきていた。
だが・・・

経営者としての忙しさとプレッシャー、金策に走る毎日で、家にいる時間が極端に減った。それでも、夫は自分たちのために寝る時間も割いて頑張っているのだと信じていた。

仕事のため、ひいては自分たちの生活のためなのだと自分に言い聞かせていたが、それが実は、夫の浮気だったと知るまでにそれほど時間はかからなかった。

夫の慎二が独立して半年後のことだ。

一回り以上年下の、水商売の女と深い仲になっていたのだ。

夫を信じてひたすら家庭と子供を守ってきた美登里にとって、この裏切りは屈辱的である上に、今まで一所懸命に支えてきたことへの憤怒で、虚脱感を禁じえなかった。

平謝りに謝る夫に対し、決して許されることではなかったが、子供のことを考えると安易に離婚するわけにもいかず、我慢して許すしかなかった。

だが、

慎二の手が自分に触れると、その手で他の女を愛撫していたのかと思うと、汚らわしく、とても耐えられるものではなかった。

虫のいいはなしだった。

自分だって、慎二と知り合う前は、何人かの男が自分のからだの上を通り過ぎたのだ。

でも、それは結婚前であり、慎二と知り合う前の話で、慎二と知

り合ってから慎二一筋だったのだ。

自分はそれを守り抜いてきた。

それなのに、

こどもを押し付けて、自分は他所^{よそ}で若い肉体を貪^{むさば}りついていたのかと思うと、無性に腹立たしく、決して記憶の外に追い出すことができなかった。

夫婦の営みも、夫婦としての信頼も、家族としての温かみも、人間としての尊重も、そこには存在し得なくなっていた。

浮気が発覚してから一年間は我慢した。一年間沈黙していた。

だが、一年後に、二度目に夫の周囲に女の影を感じたとき、それが事実かどうか確かめることもなく、迷わず離婚を決意した。

慎二にも同情の余地はあった。一回だけの浮気で、美登里は夫に自分の体に触れさせなかった。セックスを拒否してきたのだ。そのはけ口として、夫が外に目を向けしまうのは無理もないことのように思えた。

思えばこの一年、夫への不審感と猜疑心と、汚れたものを蔑むような視線しか送ってこなかったような気がする。

仕事で遅くなるという電話が来れば、どんな女と過ごすのかと疑い、日曜日の朝から接待ゴルフだと出かけていけば、助手席に座っている女の姿を思い浮かべている毎日だった。

洗濯籠にだされたワイシャツを手にとって匂いを嗅いでみたことも一度や二度ではない。

箆笥の下着を手にとつて、こんなに派手な下着を持っていたかしらと考えたこともあった。

たった一回のことで、と夫は憤慨していた。夫の浮気くらいで、と多くの主婦は美登里を説得するかもしれない。

子供の幸せを考えたら離婚は思い留まるべきでは、とある夫婦は残念がるかもしれない。

だが、娘を保育園に送ったあとの時間は、地獄といってもいい

らい辛く、切ない時間だった。

自分を抱かない夫の背中を見ている自分の脳裡に浮かぶことは、今日も自分より若くて健康的な肉体に溺れてきたのかと考えると、眠っている夫のペニスを切り取ってしまいたくなるのだった。

このままでは気が狂う。

このままでは人生を後悔してしまう。

美登里は、何も言わずに静かに、帰宅した夫の前に離婚届を差し出した。夫の慎二は、ちよつと驚いた表情をしたが、何も言わずに判をついた。

夫は親権を主張しなかった。

娘の陽子と一緒に、夫が数年前に買ったマンションから出て、実家に近い都営住宅に引っ越したとき、美登里は、今日から人間らしく生きられるとホツと安堵したのを憶えている。

そして、二度と結婚はしない、いや、恋愛だってもうできないと思った。

そのときは・・・

午後十時過ぎに、直樹は遠慮がちに彼女の住居を訪問した。

既に一人娘の陽子は眠りについていて、彼女が電話で、娘が眠ってから来た方が、最初は都合がいいと言ったのだ。

どうせ明日の朝は顔をあわせなければならぬのだが。

美登里の料理は手際もよく、味も悪くなかった。

「お腹一杯になったかな？」

「うん、十分だよ」

「よかった、味は？」

「言うことなし」

「ほんとかなあ」

美登里は満更ではないという笑顔で、それでもお世辞ではないかと思っただけ。

「ほんと、美味しかった」

「うん」

美登里は満足そうに微笑んで、後片付けに入った。

「オレがやるのか？」

「いいよお」

大袈裟に手を振ってキッチンに向かう。

「先にお風呂に入ったら？」

「そんなわけにはいかないだろう、居候なんだから」

「そんなこと気にしなくていいよ」

洗い物をしながら彼女は笑っていた。

幸せそうだった。

少なくとも、直樹がここへきて、疲れているであろう彼女に料理をさせて、自分のはんびりソファに座ってテレビを見ていても、きつと彼女は安らぎと幸福感を覚えていたに違いなかった。

「お風呂、沸いてるから」

「一緒に・・・」

「えっ、なに？」

「一緒に入らないか？」

暫く沈黙があった。

「恥かしいよ」

「どうして？」

「明るいじゃない」

「じゃ、電気消すよ」

「それじゃあ、洗えないよ」

彼女は会話を楽しんでいるようだった。

一緒に風呂に入ろうという申し出に、恥ずかしがってはいるものの、嫌がってはいなかった。

初めて抱かれる前の照れ隠しのように思えた。

キッチンで洗い物を終えたあと、直樹は彼女の手を引いて、電気を消すという約束のもとに一緒に風呂に入った。

それはまるで新婚の夫婦のような感じだった。

直樹にとっても、美登里にとっても、それは幸せへの第一歩であるかのように、充実した時間の始まりだったのである。

【第8章へ続く】

第8章 異変

壁をひとつ突き破ると、あとは楽だった。

なんでもなかったかのうちに、ごく普通に、当たり前のように、意識していたことが嘘のように、生活の一部に溶け込んでいった。

直樹は、美登里の家に泊まることに、最初は抵抗があった。

半同棲のような生活、夫婦のようで夫婦でない中途半端で都合のいい関係、そのことに少なからず戸惑いと抵抗があったことは確かだった。

一度だけだ、一度だけ泊まろう、などと都合のいい言い訳を背負って美登里の家に行ったあの日を境に、直樹は彼女の求められるままに、彼女の家に行く回数が増えていった。

つきあい始めて三ヶ月が過ぎていった。

彼女は、直樹が訪れることを望んでいた、毎日のように。

最初は、週に一度か、二週間に一度だったが、つきあいが三ヶ月を過ぎて、半年近くになると、美登里の家に泊まる頻度が、週に三回から多いときには四回も泊まるようになった。

自然と、直樹の衣類も美登里の家に増えていったし、金曜日の夜に泊まって、そのまま週末を美登里の家で過ごすことも珍しくなくなっていた。

外で会えないのだから仕方がないという言い訳がふたりにはあった。

美登里の一人娘と一緒に、週末遊びに行くことも珍しくなかった。まるで家族のような雰囲気だった。

「たまには、飲んで帰ろうか」

と、直樹が提案して外で飲んでも、必ず一緒に彼女の家に向かう、いや、一緒に飲んだからこそ、一緒に彼女の家に向かうのがあたりまえのようになっていた。

彼女の娘の陽子とも、向こうがどう思っていたかは別として、本

当の親子のように溶け込んで言った。陽子が直樹に懐いていたのである。

これがいいことなのかどうか、それは直樹にもわからない。少なくとも、直樹の中にはこのままでいいという気持ちはなく、彼女が直樹をずっと、一生涯必要だと言ってくれば、直樹は彼女を籍に入れることも考えていた。

だが、彼女はそれを望んでいなかった、少なくともそのときは。いつまでも、このままの状態で果たしてよかったのかどうか。疑問に思いつつも、口に出さずに、この状況に甘えていたことは確かだった。いや、かすかに罪悪感があっても、美登里も直樹も、そのことを封印して、ふたりの感情のまま、求めるまま、すごしていたのだと思う。

美登里の家に泊まる頻度が、週に三、四度となつて暫く経った頃、直樹は束縛感に苛まれるようになった。

彼女の家に行かないと、彼女が不機嫌になったのだ。自分の家に帰るだけなのに、正当な理由を考えなければならなくなつた。

彼女の家において、直樹の携帯電話にメールが入ると、彼女の顔色が一瞬にして変わった。

直樹は元来、二股やそれ以上と同時につきあうことを苦手としていた。何故なら、絶対にバレるからだ。彼の携帯電話に入るメールも、会社の同僚か、それともなければ過去に通った六本木のクラブのホステスの営業メールに過ぎなかったのだ。

だが・・・

「電話が鳴ってるよ」

冷やかに彼女は言う。

相手を確認すると、急いで出る必要のない相手だったりする。というよりも無視しても問題ない相手だったりする。

つまり、飲み屋の女の営業電話だ。

「出なくていいの？」

直樹が電話に出て、相手が誰なのか、彼女は知りたかったに違いない。決して相手が、彼女の考えるような女であるはずがないのに。「あたしの前じゃ、出られないの？」

嫉妬心をむき出しにした美登里の険しい目が、直樹をじっと見つめていた。

ふたりの時間を大切にしたいから、だから緊急以外の電話やメールは無視するのだ、と直樹は言ってやりたかった。いや、実際にそう話したこともある。

だが、美登里はそれを信じている風ではなかった。

直樹は、美登里と一緒にいることに息苦しくなってきた。

徐々に、じわじわと、後悔の念が近づいてきていた。

彼女が、これほど嫉妬深い女だとは思わなかった。いや、これが普通なのかもしれない。だが、つきあい始めたとき、美登里は、自分の寂しい心と体を埋めてくれればいいと言ったのだ。

直樹を独占し、束縛するとは思っていなかったのである。

だから、直樹が彼女と一緒に過ごすことに煩わしさを感じ、徐々に自分ひとりの時間を作りたくなったとしても、誰も彼を責められないと思う。

直樹は、仕事が早く終わっても、例え友人と飲む約束がなかったとしても、直樹は自分の家に帰ることを優先し始めた。今までは、時間が空けば必ず美登里のもとに駆けつけたのに。

直樹と彼女が結婚している訳ではなかったのに、彼女は自分の家に来ない理由を執拗に尋ねてきた。

「家に帰っても一人じゃない。だったら、こっちに来ればいいじゃない？」

「それとも、家に誰がいるのかしら？」

直樹が、自分の家に、理由もなく帰宅することが、彼女にとっては信じられない行為だと決め付けていた。

直樹にとってどちらが自分の家なのかわからなくなってきていた。直樹は、ふと思い出した、彼女の離婚の理由を。

そう、彼女は夫のたった一度の浮気が許せずに離婚したのだ。と同時に、彼女が直樹とつきあい始めたときのセリフも走馬灯のように頭を駆け抜けて行った。

「あたしは、結婚はもう懲り懲りなの。あたしが欲しいのは恋人。あたしを甘えさせてくれる恋人がほしいのよ。あたしをいつも包み込んでくれる優しい恋人……」

いつも……

直樹の脳裡に、この言葉がいつまでも響いていた。

直樹が美登里と付き合い始めて八ヶ月が過ぎた頃、ある出来事が起こった。

「今日、親友と飲むことになってるんだけど、貴方も来て」

美登里が、休憩時間にわざわざ直樹のフロアまで来て、直樹に告げたのだ。この頃には、社内で美登里が直樹に話しかけることも、会う約束を人前ですることにも、美登里は抵抗がなくなっていた。

隠し通そうという気持ちが薄れていたのだ。

「オレが？」

「嫌なの？」

美登里の目が険しくなった。

「いや、そういうわけじゃないけど、どうして？」

「親友に紹介したいんじゃない、それとも紹介されたら困る？」

最近、美登里の誘いに素直に承諾しないと、必ず突っかかってくる。

「そんなことないけど、せつかくの親友との時間に邪魔しちゃっていいのかなって思っただけさ」

直樹は、白々しい言い訳のような口調になった。

「紹介したいし、貴方のことは、もう親友に話してあるの。会いたがつてたわ」

「そう・・・」

「いやならいいけど」

いいけど、という顔ではなかった。

ここで嫌だと言ったら、きっと余計な思考が彼女を支配するだろう。

「そういうことならよろこんで行かせて貰うよ」

「よかった、親友に言っておくわ」

「ああ、そうして」

直樹は、ホツと胸を撫で下ろすとともに、今夜は自宅で寛いで、映画のDVDでも観ようと思っていた計画が、また崩れたことを残念に思っていた。

ところが、このことがふたりの関係を終焉へと向かわせるきっかけになるうとは、直樹も美登里も知る由もなかった。

「時間がないの、ベッドに行かない？」

志子が痺れをきらしたように、直樹に声をかけてきた。

「そ、そうだね」

直樹はぎこちない仕草で、自分の煙草を灰皿に押し付けた。

志子とのセックスが嫌なわけではなかったし、彼女のスレンダーだが、とても三十二歳とは思えない肉体にからだを沈めてみたいという願望はあった。

抱いたからと言って、直樹の今までのポリシーが否定されるわけじゃない。そう自分に言い聞かせて、直樹は彼女の肩を抱いて引き寄せた。

彼女は、ホツとしたような表情で、直樹に持たれかかり、そつと目を閉じた。

直樹は彼女の唇に柔らかいキスをした。ほんのちょっとだけ唇をあわせたのだ。

彼女は、直樹の唇を、まるで渴いた喉をやつと潤せるかのように、しゃぶりついてきた。

彼女の肩を持つ右手に力が入ったとき、彼女はそつと唇を離して、「ベッドへいこう」と促した。

「ああ」

直樹は、彼女の足の下に左腕を通すと、彼女を持ち上げた。スレNDERなからだどおり、彼女は比較的軽かった。

ベッドにそつと寝かすと、直樹は彼女の隣にからだを滑り込ませた。

からだに巻かれていたバスタオルは簡単に取れた。

小さめの形のよい乳房と、男遊びをしているとは思えない薄い茶色の乳首が目飛び込んできて、思わずごくりと唾を飲み込んだ。

志子は目を閉じてじつとしている。

やつとそのときが来たという安堵感が表情に表れていた。

「タオルを取って」

志子は、直樹のからだに巻きついていていたバスタオルを剥ぎ取るように奪った。

直樹は、志子の上に重なるようにしっかりと抱きしめると、彼女も腕を直樹の背中に回して直樹をしっかりと抱きしめた。

そして、少しだけからだを浮かせると、直樹は志子の唇に自分のそれを重ねた。

ゆつくりと志子の胸を右手で包み込んだ。いざ、志子を抱き始めると、からだは勝手に女を悦ばせ始める。げんきんなものだ。先へ先へと積極的に進んでいった。

結局自分は女が好きなのだ。やっぱり自分はセックスがしたかったのだ。そんな思いが、頭の中を廻り始めた。

「どうしたの？」

指が止まったらしい。志子が目を開けて直樹を覗きこんだ。

「なんでもないよ」

直樹は優しくそう言って、彼女の潤ってきた彼女の最も感じる部

分を指で押し付けた。

「あ……」

思わず志子が目を閉じて声を漏らす。そのまま、直樹の指は彼女の中に奥深く、先まで進んでいった。

志子の喘ぎ声が一段と大きくなり、腰が微かに前後に動き始めたとき、直樹はそろそろ大丈夫だと確信して、顔を上げて自分のからだを志子の上に重なり始めた。志子は自ら足を目一杯開き、腰を浮かせて、直樹の侵入を導いていた。

「もういい？」

愚問だと知りつつ、多少皮肉も手伝って、直樹は志子に確認した。
「うん」

直樹は、返事を聞くまでもなく、自分の生命それを、志子の中心へとゆつくりと、着実に沈ませて行つた。その重くて硬い感触は、細くて深い奥まで達すると、潤いの中に溶けていった。

「っ、っけなくて、い、いいの……？」

志子が声を喘ぎながら、それでも一言言い添えた。

「着けたほうがいい？」

志子は小さく首を振り、

「どっちでもいいけど……」

「大丈夫。中には……」

「わかった」

直樹は前後のゆるやかな動きを開始した。大きな声が一際大きくなつて、やがて苦しそうに呻くと、大きな溜め息が志子の口から漏れた。

到達したのだ。

ぐったりとしている志子のからだから直樹は離れて、彼女の顔を覗き込むと、両手で腰を軽く持って、うつ伏せになるように示唆した。

志子はそれを察知して、そしてそれに従うようにからだを捻り、うつ伏せになると、そのまま腰を自ら持ち上げた。直樹は、背後か

ら全身を志子に押し付けるようにして、彼女の中心に自分の生命を押し入れた。腰を精一杯突き上げた彼女は、顔をベッドの枕に埋めて喘いだ。

声が枕でくぐもった。と同時に、志子も到達したらしく、枕を口に押し付けているにもかかわらず大きな喘ぎ声が、呻いたかと思うと、ひくひくと波打つ膺をたつぷりと湿らせて、その場で力なくベツドのシーツの中に沈んだ。

直樹は、彼女の横に仰向けに寝転んで天井を見つめた。

直樹は、ライトが煌々と照らす明るい部屋の中で行っていたのだと気づいた。

直樹に罪悪感は無かったが、満足感も充実感もあり感じなかった。志子がそつと直樹に寄り添ってきて、首筋にキスをしながら、直樹のそれを手のひらで包み込むように触りだした。

「背中に・・・」

「ううん、大丈夫よ」

「オレが拭くよ」

「平気。このままで、しばらく・・・」

直樹は小さく頷いた。

直樹のそれはなつとりと汚れていたが、彼女はおかまいなしに、手のひらで握りながら上下に動かし始めた。やがて、彼女は姿勢をかえると、直樹のそれを口の中を含みだした。

「ちよつと・・・」

直樹の制止に、彼女は小さく笑って、

「綺麗にしてあげる」

直樹は、そんな志子を見ながら、とてもいとおしく感じはじめていた。

なんだろう、この気持ちは。

今までにない気持ち。こんな献身的な女が自分の周囲にいたのだろうか。遊びとはいえ、これほどまでに、相手のすべてを受け入れようとする女を、直樹は知らなかった。

大事にしたい。

手放したくない。

そんな思いが、直樹の脳裡に芽生え始めていることに、直樹自身驚いていた。

直樹の中で、何かが生まれて、そして何かが壊れる気配がしていた。

五年前、杉山直樹はひとりの女に苦しめられていた。

当時、直樹はＩＴ関係の会社の人事課長をしていた。ちょうど、宮下美登里と知り合う三年前のことだ。

人事課長をしていた直樹は、ある日遠藤千鶴という女子社員から相談を受けた。

遠藤千鶴は、経理部に在籍していて、主に出納関係の仕事をしている勤続五年、二十八歳の中堅社員だった。

仕事は出来る方だと思う。バリバリやるタイプではないが、コツと与えられた仕事を着実にこなし、ミスも少なく、細かい気配りも出来る方だったと記憶している。

直樹が千鶴に呼び出されたのは、千鶴が上司の角田係長に怒られた直後だった。小会議室で向き合った直樹は、千鶴の相談が何なのか全く検討がつかなかった。

「どうしたの？」

千鶴は、俯いたまま何も話そうとしなかった。直樹は、彼女が話したくなるまで待つことにした。

直樹には、社員からの相談が多い。ＩＴの会社だと、特にベンチャー企業だと、若い社員が多い上に、鬱に陥る社員も少なくなかった。直樹のように話を聞いてやる人事の社員が必要なのだ。

特別なことをしない。直樹は、ただ単に彼等の愚痴にも近い話を聴き、時折り相槌を打ったり、時にはアドバイスをしたりするだけ

だ。決して説教や注意をしない。

話す彼らも、実は自分がすっかりしないといけないことくらい判っているのだ。だが、誰かにこの気持ちをぶつきたい、聞いて欲しい、慰めて欲しいのだ。それを直樹が時間の許す限り相手をしていただけだった。

遠藤千鶴は、そんな中でもあまり愚痴や文句を言う方ではなかった。淡々と仕事をこなす彼女に、直樹自身学ばせて貰っているほどだった。

だから、今回の呼び出しに、直樹は少なからず驚きと不安を抱いていた。

「誰にも・・・言わないでいただけますか？」

小さな声で、千鶴は言った。顔はまだ俯いたままだ。

「内容にもよるけど、ふたりで解決できることなら、悪戯に広げることはいらないから」

直樹は、慎重に言葉を選んで諭すように言った。

「実は・・・」

千鶴は、まだ躊躇っているようだった。直樹は、苛立つことなく、ゆっくりと目の前のお茶に手を伸ばした。

長くなりそうだな、と直樹は思った。今日のスケジュールを頭に浮かべる。特に急ぎの仕事は詰まっていらない。問題は、千鶴が長く席を外せば、上司の角田が騒ぎ出すということだった。

彼は、そういう上司だったからだ。

「少し時間を置いてから聞こうか？」

直樹は、柔らかい口調で千鶴に言った。あまり長く千鶴を会議室に足止めできない。

上司の角田が騒ぎ出すからだ。

「大丈夫です。すぐに席に戻りますから」

千鶴が顔を少しだけ上げて、

「実は、セクハラを受けています・・・」と、ますます消えそうな声で言った。

「えっ？」

一瞬、千鶴がなにを言ったのか頭脳が回転しなかったが、「どういうこと？」と、直樹が優しい口調で確認した。

「詳しいことは、仕事が終わってから話したいんですけど、杉山さん、今日、お時間取れますか？」

直樹は、定時後に何の予定もないことを頭に浮かべて、

「ぼくは大丈夫だけど、それでいいの？」

「会社で話せる内容ではないので」

そう言つて、千鶴は席を立った。

「あとで内線します。このことは誰にも話さないでください」

「わかりました」

直樹の返事に安心したのか、ちよつとだけ微笑んで千鶴は会議室を出て行った。

人に話せる内容じゃない、直樹はそう思った。

千鶴がセクハラを受けている？ いったい誰に？

直樹は、角田の意地悪そうな表情を浮かべながら、まさかな、と小さく呟いた。

【第9章へ続く】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9655v/>

その出逢い

2011年10月9日03時15分発行